月の瞬き

幸紀涅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月の瞬き

【Ｎコード】
Ｎ９６５９Ｇ

【作者名】
幸紀涅

【あらすじ】
大金持ちのおじいさんに拾われる前までの記憶がない少女、葉月。そんな葉月と出会ってしまった異世界の王子様。葉月を愛する『魔王』と呼ばれる青年。そんな３人が繰り広げる物語。シリアスあり笑いあり、そして恋愛ありのお話です。

1：みぞれ交じりの雨

冷たい。耳が冷たくて痛い。痛いて何？冷たいって…？

ここ…は…？

そこは霙交じりの雨が降り注ぐ、山の奥深くであった。

まだ幼い少女は、ただ茫然と立ちつくすのみ。

少女は、何も…何もわからなかった。どうすればよいのかも、何をすればよいのかも。

そして、どれほどの時間がたっただろう、その時、一人のおじいさんが少女を見つけた。

「どうしたんだい、こんな山奥で？　」

ひどく驚いている様子だ。

「……　」

この人が何を言っているのか全く分からなくて、黙り込む少女。

「まだこんなに小さな子供を、山奥に放り出すなんてなんて親じゃ

！」

今度は怒っている様子だ。

「大丈夫かい？こっちにおいで。そこにワシの別荘があるんじゃよ」

ゆっくりと近づいてきたおじいさんに連れられ、少女はただ付いて歩くことしかできなかった。

その後おじいさんは懸命に少女の身内を捜したが、結局なんの手がかりも掴めずじまい。

けれどもおじいさん（この優しいおじいさん、実は天下の大財閥『音野瀬グループ』の総帥というもので、つまり優しいだけでなく大金持ちのおじいさんだったのだ）の好意で、少女は施設送りではなく引き取られることとなった。

おじいさんはその少女の名前を音野瀬（おとのせはづき）葉月として、大切に大切に育てた。

それから約１０年という月日が過ぎ去ったころ、おじいさんは息を引き取った。

おじいさんの身内、つまり音野瀬の名のつく人々は、葉月をずっと嫌っていた。

どこぞの娘か分からないうえに、おじいさんが溺愛していたため、しまいには音野瀬グループまでも乗っ取られてしまうのではないか、と思うことは当然ではあるのだが。

そしておじいさんが亡くなると途端に葉月を今まで以上に冷たくあしらって、この家、つまり音野瀬と彼女の関わりを断とうとした。

葉月はそんなことはとっくの昔から気づいていたのであったが…

2：おじいさんの手紙

葉月サイド◇◆◇

「ちょっとあの子、いつまでこの家にいるつもりなの？目障りったらありゃしないわ」

「おじい様ももういないんですし、もうこの家には要はないはずよねえ」

わざと聞こえるように大声で話すおばさま方。あー、ホントに憎たらしいったりゃありゃしない。

「おばさま、ごきげんうるわしゅう」

そういいながら、こちらも宣戦布告だーっと思いはするものの。

さすがにこのまま家にいることはちょっと辛いかな…。

おじいちゃんは……もういないし、ね。

あっ！！そういえばおじいちゃんが生きてるとき、

「わしが死んだら、この手紙を読むこと。分かったかい？」

そんなこと言ってたような…。

と、いう訳で、私は急いで自分の部屋に戻ってその手紙を探し当てた。

「えぇっと、なになに、『この手紙を――――…

『この手紙を読んでいるということはもうわしはこの世にはおらんのか。
葉月、わしが死んでから、お前さんはこの家にいることが余計に窮屈になってしまったのじゃろうな。
すまん。わしは捨てられたお前に、幸せというものを存分に味わってほしいのじゃが、やはり人生というものは山あり谷ありである。
そしてな、人というものは金に目がない。そんなことは言わんでもお前さんなら分かっているだろうが、くれぐれも愚痴などを真に受けてはならぬぞ。
そうそう、一番に書き留めておかぬことを忘れておったわ。葉月、きっとわしが死ねばその家にはもう居づらいはずじゃ。
だからな、お前さんに住む場所と、お金を用意しておいた。詳しくは、行ってみるがよい。
そこでよき高校生活を今後も過ごせるよう、天国から祈っておるぞ。
前を向いて進むのじゃぞ、葉月。　　歳三おじいちゃんより』

ようやく読み終わった。私は出てくる涙を必死でこらえながらも、さっそく出で行く準備を始めた。

数時間後、私は音野瀬の人々を集めた。

「わざわざ、集まっていただき、ありがとうございます」

葉月は一礼して話を進めた。

「今日はお話すべきことがあって、皆様にお集まりいただきました。わたくし、音野瀬　葉月は今日をもってこの家を出ていくことにいたしました。今までありがとうございました。」

するとおばさん（さっき嫌味を言ってきたやつ）が口を開いた。

「出て行くなら、あなたは今後、音野瀬に纏わるすべてのことに関わらないで下さいねえ」

言われなくとも、分かっています。

「ええ、分かりました。今後、私がこの音野瀬の家に入ることはないでしょう。今までお世話していただき、誠にありがとうございました」

そう言って私はその場から立ち去った。

３：執事さんとかお城とか。

１０年というものは早いものだ。私がおじいさんに拾われたのが、昨日のことのように思い出せる。言葉も理解できなかった私を、ちゃんと物事の道理が分かるように、と育ててくれたおじいちゃんは只者ではないと思う。

三蔵おじいさん、ありがとう。

そんな思いを胸に秘め、私はおじいさんが用意してくれたマンションへとたどり着いた。

おじいさんが用意してくれる『私の家』なのだから、

きっと高級マンションなのだろうなというのはある程度予想していたが、

その…これってちょっと派手…。

見た目は、ずばり、ヨーロッパ風のお城。噴水があって、入口の門がやったら大きい。

今までがずっと豪勢な生活だったので、たまに感覚が狂っていると言われることがあったが、おじいさんの『金などに頼らん』かつ『普通の常識を忘れてはならん』とかいう教育方針のおかげで私はず

っと普通の家におじいさんと2人で住んでいたし（わざわざおじいさんが普通の一軒家を購入）、いたって『普通の生活』を送っていた…はず。

気合いを入れなおし、中へと踏み込んだ。

天井がかなり高くて、巨大シャンデリアが光り輝いている。

ぼーっと辺りを観察していると、いきなり声が響いた。

「おかえりなさいませ、ご主人様　」

メイド喫茶の男バージョンか、と突っ込みを入れたくなるのを抑えつつ、

「あの…すみません。私、音野瀬葉月と申します　」

一応、雰囲気的にお嬢様を気取ってみた。

すぐに返事が返ってくる。

「話は伺っております。葉月お嬢様、おかえりなさいませ。葉月お嬢様のお部屋は最上階となっております。ご案内いたしますので私に付いてきてくださいませ　」

この扱いは…駄目だ。なんだか気味が悪い。

さっそく言ってみよう。

「あの、すみません 」

「なんでしょうか？ 」

「そのお嬢様っていうの、やめてください。普通に呼び捨てでいいです 」

「しかし……… 」

むっとした顔を作って、少しだけ睨んでみながら、

「お願いします 」

というと、

「では、せめて葉月様、と呼ばせてください 」

様か…。まあお嬢様よりマシだよね。

そうこうしているうちに部屋へとたどり着いた。

「葉月様。こちらがお部屋になります。音野瀬様から、生活に必要なものは全部揃えるようにと伺っておりましたので、揃えさせていただきました。何か不都合がありましたら、何なりとお申し付けください」

「…えぇっと、ありがとうございます 」

「それから、音野瀬様から葉月様に、５億円、預かっております 」

おじいさん、５億は多すぎるよ！！

「なんですと？！　」

さっきまでのお嬢様気取りが台無しな一言。それを気にすることもなく笑顔で話を進める執事さんっぽい人（実際、執事です）。

「この部屋にある金庫に一部入っております。残りはあなた様通帳に入っているとのことです。くれぐれも無駄遣いのないように、と、１日３０００円までだ、とのお言葉を頂戴しておりますので、なにとぞお耳に止めゆくよう、よろしくお願いいたします　」

「は…い　」

そして私にカードキーを渡すと、執事さんは帰ってしまった。

4：登場

「なんだかなー…。慣れないなー」

ここに来てから数日が経った。

が、やはり『ピカリン（？）お城』の我が家には、まったくなじめそうもない。

今は夏休みだけど、数週間後、学校が始まってしまったら…。

「引っ越ししたよ～。しかも一人暮らし」などと報告すれば、皆きっと押しかけてくる違いないはず。

絶対に友達はこの家には連れて来てはいけない気がする…。

連れてきたが最後、きっととんでもない噂を流されるだろう。

（以前に流されたことが多々ある…）

ああ、考えただけで恐ろしい。

さて、気分転換に夕御飯でも作るとするか。そう思い、ふっと立ち上がった瞬間――――…

ガシャーン！！！パリーン！！ドスッ！！

ベランダのほうから物凄い音が聞こえてきた。私は何事かと思い、急いで駆け付けた。

駆け付けた…はいいけど、さ。誰ですか、あなた……。

見ると、ピカピカに綺麗にされている窓ガラスにへばり付いている男子が一名。

ギャ――！！！！と叫びたくなる怖さを抑えて、いっそいでカーテンを閉めた。

え？何？対処法が間違ってる、って？？

こんなときは見なかったことにするのが一番なんだよ、分かってないね～。

「ど、どうしよっか…」

冷静になるのよ、葉月。明日はそんなこと言っててもは始まらない。

泥棒だったらすぐに警察に電話しなきゃ！！

でも…警察…ね。（↑何故か警察が大嫌い）

よし、一旦お話してみよう。

おじいさんも、人間との良好な関わり方は、たくさんお話をすることだ、とか言ってたし、大丈夫だよね。

もう一度、今度は声に出して

「よし」

と言ったあと、緊張を抑えつつもカーテンを豪快に開けた。

間もなく息を大きく吸い込んだ。

「ごきげんよう、私の名前は音野瀬葉月。年齢は多分１６歳そこそこのはず。今日は泥棒とは言えど、この家に遊びに来ていただいてありがとう、でございます」

言葉が少し間違っていたかもしれないけど、それ以外は完璧な挨拶だったな。

そんなことが脳内をクルっと一周したとき、

「あんた、やっぱり葉月さんなんだね！？　」

男のはず…だが、やたら声が高い。そんな冷静な脳内の考えとは裏腹に、ひどい言葉が口から出てしまった…。

「葉月でございまーっす」

サ●エでございまーす、かよ！！とかいう、自分乗り突っ込みは心の中だけに留めておこう。

「あはははっ。聞いた通り、勢いのある可愛い子だねぇ。あらためまして今晩は、葉月さん。僕の名前はカイン。まさかこんなところで君に会えるとは思いもしなかったけど……。君にはとても大事な話があるんだ」

5：異世界って

「どんな…話ですか？　」

「君、ファイ・デルタって名前聞いたことない？　」

あ！！その名前って…

「知ってる、知ってるよ！！　私の初めてできた人間のお友達だもん！！　」

「僕もね、ファイのの世話係かつ友達なんだ　」

世話係という言葉に驚いた私は、改めてカインをまじまじと彼を見てみる。

とても世話係などやってるような年には見えない。見た目は私と、もちろんファイとも同い年くらいのはずだし。

さっきは窓ガラスに張り付いていたので、服装で男と判断した訳だが（ゲームに登場する勇者さんみたいな服装）、その顔立ちは十分女の子でも通用するほど可愛らしい。

目がくりくりしてるし…。そんなこんなで、彼をじーっと秒見つめているとていると、

「なにか…僕の顔についてる？　」

「いえいえ！なんでもないです。お友達さんだったんですか。じゃあ、泥棒さんじゃないですよね 」

「泥棒？あぁそっか、普通は勘違いするよね。ごめんね 」

「いえ、そんな…こちらこそ… 」

泥棒と勘違いしてしまったことに（それが普通）、ちょっと自分が居た堪れなくなった。

「それはそうと、今から君には、ガラム王国に来てもらうよ。ファイが君に物凄ーく会いたがっているんだ 」

「えぇ？？もしかしてファイに会えるの？って、そういえばファイは元気にしてる？あれからまったく会ったことないからな… 」

「ええ、会えますよ、ファイに。そりゃもう元気、元気 」

そういえば、ガラム王国というのは一体どこにあるんだろ。南国かな。

「嬉しいなぁ。あのファイに会えるなんて。えぇと、その…でもですね、外国に行くなら、準備とかいろいろ大変だし、飛行機の予約も取らないと！ 」

「えぇっと、その言いにくいんだけどね、ガラム王国はこの世界にはないんだ…。知ってるとおもってたんだけどな…… 」

「はい？ 」

この世界にはないですと！！

せっかく落ち着いてきたはずの思考回路がまたグルグルし始めたような気がする…。

「簡単に言えば異世界だよ、異世界 」

何か引っかかる言葉…。

「異世界… 」

声に出してみると余計に引っかかる。

「そう。異世界 」

「異世界って… 」

やっぱり引っかかる…。なんだろ…。

「そうそう。異世界 」

「あぁぁ――――――！！！！ 思い出した！！ 」

私の中の記憶の断片が『異世界』の言葉によって、見つけ出されたような…そんな感じ。

どうして……どうして今まで忘れてたんだろう。

6：僕は決して許しはしない。

ファイサイド◇◆◇

いつかこんな日が来るのではないかと、分かっていたはずなのに…。

僕のお父様、つまりガラム国の国王が臣下に殺された。

お父様は数年前、判断を誤った。

いや、『魔王を見くびっていた』と言ったほうがいいだろう。

ルシファー・エデンが魔王になる前に、彼を処刑していたら……

世界の半分、すべてが灰になることはなかったのに……。

その多大なる虐殺があった後から、お父様は変わってしまった。

もともとお優しい人だったから、それを自分の甘さのせいだと思いこみ、苦しみ、嘆き…、まるで別人のようになってしまった。

どんなふうに変わったかって？

少しでも、自分の気に食わないことがあれば…人を殺すようになってしまった。

そんな父になってもう一年になる頃だ。
家臣らはもはや王である資格はないと判断したのだろう。
そしてその息子である僕も、一緒に消せば、今後好きなように国を動かせる。

「ファイ、逃げて！！早く！！！」
焦りと怒りと動揺が混じった声。ひしひしと伝わってくる。
そうだ。今は何としても逃げなくてはいけない。逃げて、生きて必ずまたこの場所に戻ってくる。
そして、半分消滅した世界を、『王』としてなんとしても復興さなければならない。
そう決意した僕は、カインの魔法陣の中へ飛び込んだ。
水の中を落ちていく感じ…
魔法陣なんかの中にいるからだろうか、哀しい思い出が溢れ出してきた。
あの虐殺があってから二年…だ。僕は決して魔王を許しはしない。

必ずこの手で制裁を下してやると心に誓っている。

あの男だけは…必ず。

どれだけ落ちたのだろうか…、僕は異世界へと、たどり着いた。

7：綺麗

「痛っ！！」

魔法陣のつながった場所。そこは大きな木の上だった。

カインは優秀できっちりとした性格だが、たまにどこかぬけるから、な…。

って、そんなことを考えている暇なんてないのだった。急いで『虹の鳥』を探さなくてはいけないのをすっかり忘れていた。

『虹の鳥』とは、強力な魔力を持つ貴種な鳥。特徴は虹色に輝く美しい羽根なので一目見れば分かるはず。

そしてその鳥がなにより重要な役目を担ってくれる。

その役目とは、だな…確か、カインと連絡を取ることができるようになることと、魔法陣を発動して元の世界に帰れるようになることらしい。

かなり人懐っこい鳥だというのを聞いている。

しかも自分が生まれた世界以外の生き物には決して近寄らないという性質を持っているからきっとすぐにでも見つかるはずだろう。

多分…

下に視線を落とす。はぁ…、かなり高い。

深呼吸、深呼吸。（↑高いところ苦手）

「とりあえず、ここから降りないと…」

降りようと決意して視線を落とすと、そこにはさっき見たときにはいなかったはずの少女がこちらを見ていた。

「おにいちゃん、この木、とっても高いのに、登れたなんて、すごいね。　眺めはキレイ？　」

こちらを見ているのだが…。自分の目を疑いたくなるほど、綺麗な子だった。

長い真っ直ぐな黒髪がそよ風でほのかになびいていて、それがまた、たまらなく綺麗だった。

あの瞳も、それはまた……って、そんな暇はないんだよ、自分！！

「眺めている暇などない。それよりお前、この近くで虹色の鳥を見なかったか？　」

わざと、きつい口調で言葉を発した。この世界の人間とあまり関わらないほうがいいから…な……。

「せっかく、とっても高いのに、登れたのに、見てみなよ 」

そういえばさっきから、見た目のわりに随分片言なしゃべり方だ。

「そんな暇はないと言っているだろう。それより、見たのか、見ていないのか？ 」

その後少女は何も言わなくなった。そのかわり、もくもくとこの木を登り始めていた。

8：虹の鳥と少女

「おい、やめろ。こんな時に、前と木登りして楽しんでいる暇などないのに…　」

今は『虹の鳥』を探すことが最優先だ。

こんなところで戯れていては駄目だ。（↑自分に言い聞かせてる）

「どうして、だめ？　」

「どうしても、だ。もう僕はここから降りるからな　」

「だめ、待って　」

もっと喋りたい（眺めていたい）が、再度、「今はゆっくりしている暇などない」と言い聞かせて、仕方なく無視して逆方向に降りていると、すぐ声が飛んできた。

「わたし、も、一緒に、眺め、が見た……えっ……――――！！　」

「って、危ない！！　」

少女が手を離したのと、僕が飛び降りたのは、ほぼ同時だった。

――――ドッスン！！！

空中で見事にキャッチしたところまでは良かったのだが…。
少女を抱きかかえているので、地面に尻から落ちてしまった。
「痛ッ！！…大丈夫か？　」
見ると、泣いていた。
満点の笑顔で。
「おにいちゃん、いい人。助けて、くれた。助けて、くれた　」
そういいながらぎゅっと首にしがみ付いて抱きついてきた。
そして耳元に口を寄せて、
「ありがとう　」
この言葉には、痛みも『虹の鳥』のことも吹っ飛んでしまうほどの力がこもっていた。
仕方ない。落ち着くまで、こうしていてやるか。

そうして数分間なにも言わず抱き合っていると、少女がいきなり手を離して立ちあがった。

そして、林の方へと走り出した。　驚いた僕は後を追う。

林の少し奥の方。太陽の光がまちまちになって少女を照らす中、

僕はそこで見た。

少女がすっと手をあげると、そこに虹色に光り輝く鳥が舞い降りてくるのを。

嬉しそうにこちらに向かって歩いてきた。

「おにいちゃん、私のね、名前は葉月、っていうの。おにいちゃん、は？　」

「僕の名前は、ファイ、だよ　」

「ファイ　」

「なんだ？　」

「ファイの、探し物。虹色の、私の友達　」

そう言って、『虹の鳥』を渡してきた。

9：特別な想い、なのかもしれない。

少女…葉月は家に一旦帰ると言い出したので、今はここにいない。

とりあえず、鳥に喋りかけてみる。

「おい！！カイン 」

「以外に早かったね、見つけるの 」

「そんなことはどうでもいい。どうだ、そっちの様子は 」

「国王を殺した臣下たちはもうここにはいないし、大分落ち着いてきた 」

「そうか… 」

「今回のことで分かったんだけどね、ほとんどの臣下は君が王になる器があると見込んでいるみたいでさ。思ったより早くことが解決しそうなんだ。だから、もうすこししたら帰ってこられるよ 」

「そうか……。それはそうと、気になることがあるのだが 」

「なんだい？ 」

「虹の鳥というのは自分の生まれた世界以外の生き物には決して近寄らないはずだよな？ 」

「そうだよ。近づくはずがない」

「じゃあ、何故こっちの人間に懐いているのだ？　」

「僕も虹の鳥の目を借りて、見てたんだけど…懐いちゃってたね　」

カイン…他人事じゃなくて、もうちょっと真剣に考えてくれよ。と言いたいところだが、やめておく。

後が怖いからな…。

「くどいようだが……懐くということは、あり得るのか？　」

「…あり得ないよ　」

急に真面目になった声に少しビクッとなりながらも話を進める。

「じゃあ、あの少女…葉月はこの世界の人間ではなく、僕たちと同じ世界の人間である可能性が高いということか…　」

「やっぱりファイは察しがいいね。そうだよ。あの子はおそらく、こちらの人間だ　」

「やはり…か　」

「それにしても、ファイが女の子の名前を呼んでいるなんて初めて聞いた気がする！　許嫁の子ですら『おい』とか、『お前』だったのにね～　」

「うるさい　」

「あまりに綺麗な子だったからって、見とれちゃいけないよ～　」

「お前、見ていたのか?！いい加減にし…　」

葉月がこちらに向かって走ってくるのが見えたので、すぐに話を中断した。

手に何か箱みたいなものを持っている。

息を切らしながら、僕の名前を呼んでいた。

「――ファイ・・・、ファイ、いた　」

頭を少しかしげて笑いかけてきた。葉月の笑顔は本当に心が癒される…。出会ってまだ間もないというのに、僕は…葉月のその笑顔が大好きになっていた。

「それは何?　」

箱を指さしながら聞いてみた。

「ファイ、怪我してた、から　」

そういって、僕の手を取り、掌を上に向ける。すると、掌に少しだけだが切り傷があった。気づいていたが、たいしたことはないので、放っておいたのだが…。

よく気づいたものだ。

「ファイ、大丈夫？　」

「これぐらい、なんてことはない　」

心配そうな顔をしながら、葉月は傷の手当を始めた。

「ファイ、痛い？　」

これぐらいのことで、こんなにも親身になってくれる子は他にいるだろうか。

「痛くないよ。ありがとう　」

心の底から出た『ありがとう』だった。

人に優しくしてもらうということは多々あるが、それはすべて僕が王の息子だからだ。

でもこの子は違う。僕のことなんて名前くらいしか知らないのに、こんなにも優しく接してくれる。それがたまらなく嬉しかった。

１０：恐ろしい爺さんだ。

それから葉月の家に案内された。

こちらの世界のことはよく知らないが、この家はそこそこ…というか、かなり立派なほうだと思われる。

「葉月の、おじいさん、なの」

紹介されたのは、なんというか…迫力のある爺さんだ。

とりあえず挨拶しないと、だな。

「名をファイ・デルタという。その……」

その……。何を言えばいいのか分からない。

『異世界から来ました』とかか？いやいや、それは駄目だ。信じてもらえるはずがない。

じゃあ、『葉月と友達になったので遊びに来ました』とか？それも駄目に決まっている。

いったい…なんて言えばいいのだろうか……。

「お前さん珍しい名前じゃのう　」

いきなり喋り出したので、ビックリして後ずさってしまった。

「まあまあ、そんな硬くならずに、ゆっくりしていけばよい　」

そう言いながら、…少しずつ近づいているような気が…する。

こんなことを口に出したら、男が廃るとか言われそうなのだが…、

なんだかこの爺さん…物凄く怖い。

「れ、礼を言う　」

「なぁに、気にするでないわ。ああ、そうじゃ。おいしいりんごを食わせてやろう。葉月、取ってきてくれんかの？　」

「はーい　」

葉月は僕に手を振ると、走って部屋を出て行ってしまった。

ということは、だ。

2人きりだと！？　耐えられん。絶対無理だ。（↑何が）

「なんじゃ？わしの顔に何か付いておるのか？　」

その言葉で、爺さんの顔を凝視してしまっていたことに気付く。

「……　」

2人の間に、異様な空気が流れる。

どちらも何も話そうとしない。そうして数十秒だか、数分が経ったとき、爺さんはまたもや唐突に喋り出した。

「それはそうと、お前さん、葉月を連れて帰るつもりかいのぉ？　」

「……？どういう意味だ？　」

「いやな、お前さん、この世界の人間ではなかろう？　だからな、葉月のことを迎えに来たのかと思うてな…　」

……？！こいつ、いったい何者だ？

いったいどんな根拠があってそんなことを…。

普通『異世界から来た』と言って、信じる者などいないので気にすることはないのだが、信じてしまうようなら話は別である。

そうなれば、この世界の人間に、あまり僕の素性を明かすべきではないのだ。

探るように言う。

「何故そう思うのです？　」

「顔に『異世界から来ました』ゆうて、書いておったわ。それにな、葉月がわし以外の人に懐くなんて考えられんのじゃ。お前さんと知り合いか、もしくは友人か、と思ってな　」

洞察力がありすぎる…。

いや、まさか、さっきの心の声が聞こえていたのではないだろうな……。

……分からん。

まったく恐ろしい爺さんだ。

11：りんご

こうなったら、変に隠すより真実を言ってしまったほうがいいだろう。

決心した僕は、ゆっくり息を吸った。

「……僕は確かに異世界から来たのだが、葉月とはさっき知り合ったばかりだ。過去、一切関わりはない」

「そうか。それを聞いて安心したわい。……葉月はな、2年前にこの近くの林に置き去りにされておったんじゃ。こんな山奥に子供を捨て置くなんてことは、決して許してはならんこと。わしは親を探しだすことにしたんじゃ。じゃが、いくら探したって親は見つからんし、それどころか身内すら見つからん。これはおかしいと思ったわしは、『異世界』という可能性を信じてみることにしたんじゃ」

おおよそ察しのつく話だ。葉月は何者かによってこちらに送られてきたのだろう。

その『異世界に送られた理由』というのは見当もつかないが。

それと、もう一つ疑問に思うことがある。

「異世界から来たという可能性を信じる、ということは葉月が『異世界から来た』と言ったからか？」

そうだ。そうでなければ『異世界から来た』など信じられるはずがない。

「いいや、違う。葉月自身、何も覚えとらんようでな…、言葉すら忘れておって…」

「だからあんなに片言なのか……って、じゃあ、どうして異世界なんて信じようと思ったのだ？」

「勘じゃよ、勘」

「そんなことで、信じられるはずが……」

「静かに！」

今まで普通に話をしていた奴、それもこの爺さんに、いきなり大声出されてビックリしないはずがない。

一瞬心臓が止まったかと思った。

この爺さんは、なんでこう唐突なんだ…。なんだって急に…？

爺さんの顔を睨んでやると、不気味に笑ってドアのほうを指さした。

それと同時にドアが開く。

葉月が木のかごにりんごを山ほど摘んで帰って来たのだ。

……上手い事、はぐらかされたような気がする…。

葉月はゆっくり僕のほうに歩いてきた。

「ファイ」

何か聞きたそうな顔をしている。

「おかえり。どうした？　」

「ファイ、りんご、好き？　」

「ああ、大好きだ　」

「よかった。じゃあね、そこに、座って　」

「？…ああ　」

言われたとおりにしてやると、葉月は僕の隣に座って、

「このりんご、さっき、洗ったから。食べて？　」

と、特別真っ赤に染まった、おいしそうなりんごを渡してきた。

すぐに一口かじってみる。甘くて水々しく、これはお世辞抜きで旨い。

「すごく旨いよ。わざわざ取ってきてくれてありがとう、葉月　」

こんな言葉、誰かに言ったことなどなかった。

僕に物を贈るという行為など、下心がない奴がするはずもなかったから…な。

もうすでに、この時から……僕は…葉月をどうしようもなく好きになっていたのかもしれない。

１２：一緒にいたい

その後、どこにも行く当てのなかった僕を爺さんは気前よく何日も泊めてくれた。

あちらが落ち着くまではこの世界にいなければならないので、その好意はありがたかったし、一人でいれば気が沈んでしまうだろうこの時を、葉月と一緒にいられることが何より助けになった。

しかも、爺さんは僕が異世界から来たということを信じている（知っている）訳だし、なんの苦もなくここに留まることができた。

「ファイ！こっち、こっち　」

太陽の光がさんさんと降り注ぐ中、散歩がてらに先日食べたりんごの木を葉月と二人で見に来ている。

それより今日は葉月がおかしい。

いつも以上にぴったりくっついていたり、甘えてきたり、しまいにはトイレまでついてこようとしたり…。

一瞬たりとも僕から目を離そうとしない。

そんな葉月もかなり愛おしいが、やけに妙だ。
今だって、はしゃいで僕の前を走り出したのだが、体は僕の方を向いている。
「葉月、前向いて歩かないとこけるぞ 」
「でも、ファイが… 」
急に立ち止まった。その時吹いた、のどかなそよ風に葉月の長い髪がふわりと揺れる。
「ん? 」
「いなくなるの、嫌だ 」
肩を落としてこちらに歩いてきた。真剣な顔をして、僕の前に立つ。
「ファイ、かがん、で? 」
言う通りに葉月と同じ視線になるよう、かがんでやる。
「ほら、かがんだぞ。いったいどう…… 」
どうしたのだ?という言葉は、葉月が抱きついてきたという行為によって、かき消されてしまった。
葉月は何も知らないはずだが、もうそろそろ僕があちら側に帰らなくてはならないということを、ここ数日、なにかしら感じ取ってい

る様子ではあった。

しかし、今日はすべてを知ってしまったかのような感じだ。

「私ね、昨日、見ちゃった、の」

僕の首に巻き付いている腕の力が強くなる。

「ファイと、おじいさん、が、お話、してるのを……」

そのまま、黙り込んでしまった葉月。

昨日、虹の鳥…つまりカインから、『事の次第は治まったので帰ってきても大丈夫だ』という連絡が届いた。

それを聞いた後、長い間泊めてくれたお礼と、あちらの世界に帰るということを爺さんに言いに行ったのだった。

葉月はきっとその時の会話を聞いてしまったのだろう。

こんな時どうすればいいのか、何を言葉にすればいいのか分からない…。

でも決して葉月を不安にはさせたくはない。

『僕も葉月とずっと一緒にいたい』という気持ちを込めてその体に

そっと腕を回した。

思う。

あちらの世界に帰る前に、

この子には真実を話そう、と。

……すべて話そう、と。

13：別の記憶

葉月サイド◇◆◇

私の中の記憶の断片が『異世界』の言葉によって、見つけ出されたような…そんな気がする。

なぜ…どうして今まで忘れてたんだろう。

いや……違う。

忘れてたんじゃない。

私は忘れていたんじゃなくて、まるで誰かに記憶を操作されたかのように、今まで別の記憶を信じていただけだ。

ある日、見事な金色の目が印象的で美術品のように可憐で優美な顔をしている青少年、ファイに出会った。

初めこそ冷たくあしらわれたが、木から落ちてしまった私を自らを省みず助けてくれたし、一緒にいれば居るほど、私はファイが大好きになっていった。

ファイがあの家にいるようになって数日が経った頃、おじいさんとファイとが話をしているところを偶然に聞いてしまった……。

その会話の中でファイが帰るって言葉を口にした時……私はファイが自分の隣にいなくなるのが物凄く嫌で、離れたくなくて…、気づけば涙が出ていた。

いつか何処かへ帰ってしまうのではないかなって、なんとなく感じ取れていたよ。

でも…受け入れなくて…。

私はファイと一緒にいたいから。だからそれを聞いた後、ファイの傍から離れなかった。

だってそうすれば、今だけでもここにいてくれると思ったから。

午後から散歩がてらにりんごの木を見に行くことになって、……その途中ファイが『葉月、前向いて歩かないとこけるぞ』って言ったんだっけ、な。

私が前を向いたその隙にファイがいなくなっちゃう……。

考えないようにしていた『ファイがいなくなる』ことを、思い出した私は、ファイにしがみ付いて全部話そうとした。

あの頃の私は言葉を喋るのも片言だし、思っていることがうまく言葉にできない。

でも、ゆっくりでいいから、ずっと一緒にいたいだとか、離れたくないだとか、全部話そうとしたよ。

でもファイにしがみ付いた時、私が一緒にいたいって言ったらファイが困るって分かったの。

だから…何も言葉がでてこなかった。

ここから…だ。今までの私の記憶には、その後ファイが『ずっと友達だから』って言ってそのまま何処かへ行ってしまう、というものだった。

涙で霞んだファイの後ろ姿が、今でも鮮明に思い出せる…はずだったのに。

カインさんが『異世界』って言った時、この記憶が揺らいだ。

それが気持ち悪くて、自分でもその言葉を声に出してみる…と、今まで真実だと思っていた記憶がぼやけてきて……。

まったく違う……でもこれが真実だって確信できる、別れる前の最後の思い出…が頭の中を駆け巡る。

これがきっと本当の記憶だね。

そうだよ…ね。

１４：僕だけの、

ファイサイド◇◆◇

『僕も葉月とずっと一緒にいたい』という気持ちを込めてその体にそっと腕を回した。

思う。

この子には、真実を話そう、と。……すべて話そう、と。

僕はゆっくり話し始める。

「葉月、異世界というのは分かるか？　」

「異、世界？　」

少し戸惑っているのが感じ取れた。

『異世界』の意味はまだ知らないようだったので、分かりやすいように言い直す。

「そう。ここにはない世界　」

「ここには、ない、世界……。うん、分かる。分かる、よ 」

「僕はそこからここへ来た 」

「ファイは、そこから、来た。ファイは、私の、知らない、ところから、来たんだね 」

「そうだ。それじゃあ、王子というのは分かるか？ 」

「うん！王子様、私が、読んだ本に、でてくるよ 」

「信じてもらえないかもしれないが… 」

言葉に詰まってしまった。

すべてを話すつもり…だが、葉月が信じてくれなかったらどうすればいい？

もし立場が逆だったら……。僕が知りあって間もない他人に『異世界から来た』と言われたら……。

おそらく信じることができないだろう。

自分が異世界に移動できる手段を知っていたとしても、だ。

僕は他人を何の疑いもなく信じれるような…そんな心が澄んだ人間ではないからな……。

…いろんな不安が渦巻いて言葉が出てこない。

すると、葉月が抱きついていたその手を離して、僕の目を見た。

そしてまるで僕の心の内を聞いていたかのように話し始めた。

「葉月ね…ファイの、言うことは、みーんな、信じるよ。だから、何でも、お話して？ 」

衝撃的だった。

今し方、葉月が信じてくれないかもしれない、と思った自分が堪らなく嫌になった。

この子は……葉月は、本当に心が…存在が澄んでいるのだな。

「ありがとう。僕は……僕は葉月の知らない世界の王子だ 」

「すごい！ファイ、王子様、だったんだ、ね 」

「そこで……なのだが… 」

「なぁに？ 」

ん？と首をかしげる葉月、不意にそれが可愛すぎて、愛しすぎて。

今まで17年間生きてきて、こんな感情が湧きあがってきたことは

ない。

この子を僕だけのものにしたい。この子の視線を僕だけのものにしたい。

今度は僕から抱きついた。

「葉月はお姫様になりたいか？」

「お姫、様…？うん、なりたい！」

ぎゅっと、抱きしめる力を強くする。

「僕は葉月に…だな、その……僕のお姫様になってほしい」

15：キスをした。

ぎゅっと、抱きしめる力を強くする。

「僕は葉月に…だな、その……僕のお姫様になってほしい 」

今更だが……。

葉月が理解できるようにと思っていたら、今まで考えたこともないような…かなり恥ずかしい言葉が出てきてしまった。

「ファイの、お姫様…？ 」

……それでもやはり理解してくれていないようだが…。

「ひとまずそのことは後回し、だ。……あのな、葉月。僕は今から葉月の知らない世界に帰らなくてはならない 」

僕の服を握りしめて、言う。

「やっぱり、ファイ、帰る、んだね… 」

抱き合っているから伝わってくる……葉月の体や声が震えているのが。

僕の首筋に葉月の涙の滴が落ちた。

「そう…だ。僕は……帰ってどうしてもやらなくてはいけないことがある 」

やらなくてはいけないこと、それはガラム王国を再建すること、だ。

魔王によって塵となってしまった世界の半分を、何としても元通りにしなくてはならない。

必ず……王の血を受け継ぐこの僕が、なんとしても……。

葉月の嗚咽が聞こえてくる。

……僕がいなくなることをこんなにも悲しんでくれている。

それが悔しくて、逆に…思ってはいけないと心に言い聞かせているのだが……嬉しくもある。

自分は葉月に必要とされているのではないか、と。

もしかしたら葉月も僕と同じ気持なのではないか、と。

でも今は駄目なのだ。

多くのガラム王国の民たちが苦しんでいる中、僕が恋だのなんだの言っていてはいけない。

「でも、必ず葉月を迎えに来る。必ず、だ」

「ファイ、迎え、に、来る……」

「それから…ずっと一緒にいられる」

「……ずっと、一緒？　ホント！！？」

『ずっと一緒』という言葉のおかげか、一瞬で驚くほど元気が出てきた。それを感じ取った僕は、話を続ける。

「けれど…だ。葉月がお姫様にならないと、一緒にはいられない……」

「イヤ！！　ファイと一緒に、いれない、の、ヤだよ…」

「……葉月は僕のお姫様になってくれるか？」

葉月が僕の腕を解いてこちらを見た。涙の跡はあるが、もう笑顔だ。一緒にいた数日間、葉月のいろんな表情を見てきたが、やっぱり笑顔が一番可愛い。

「うん！葉月、ファイの、お姫様に、なる…なりたい」

「葉月……愛している」

「ん？　ファイ、今何て、言っ……――」

葉月が喋っている途中だというのにもかかわらず……

僕は何より愛しい人に、キスをした。

１６：離れていても

よほどビックリしたのか、瞬きを繰り返す葉月。その頬にそっと手を添える。

「だから葉月…それまで待っていてくれるよな？　」

だが、僕の声を聞くとたちまちいつもの笑顔になった。

「うん！私、ずっと、待ってる。待ってる、から　」

「よかった。それを聞いて安心した。それじゃあ…僕はもう行く。また、一緒に話したり散歩したりしような……　」

「うん。……あのね…ファイ、笑って。私、ファイの、笑った、顔、大好き　」

「わかった。ありがとう、葉月　」

そう言い終わると、『虹の鳥』がガラム王国へ帰るための道を作り出していた。

そちらの方を向く。……ついにこの時が来てしまった。

葉月を迎えに来るとしても、何年後になるか分からない。

この別れが最後になるかもしれない。…でも絶対に死なないし、死

なせない。

今後…きっと『葉月』という存在が僕を励まし続けてくれるだろう。

そして…今度会えた時はもう絶対に葉月を離さない。ずっと傍にいる。

だからそれまでの辛抱だ。それまでの……そう心に言い聞かせる。

振り向いて葉月に何か言おうと思ったのだが、今振り向いたら絶対前に進めない。

そのまま、僕はその道へと足を進めた。

カインサイド◇◆◇

『虹の鳥』も元の世界に戻そうと思って操ろうとしたその瞬間、何者かの妨害を受け、たちまちにして制御不能になった。

『虹の鳥』の目は使えるようなので、とりあえずあちらの様子を見てみる。

すると、『虹の鳥』が作り出した道から見知らぬ女の人が出てきた。

女…は別れが辛くて泣いている葉月ちゃんの方へ向って歩いてくる。

それに気付き、その異様ともいえる殺気に驚いた葉月ちゃんは、逃げようするが体が動かないようだった。

「リリス、……もう会うことはないと思っていたのに…」

そう言って女は葉月ちゃんの額に手を当てる。

その額に触れられた手が一瞬、閃光の如く光り輝いた。

そして光が消えたとき、葉月ちゃんは地面に倒れこんでいた。

「監視をつけておいて正解だったわ。……リリス、あなたはすべて忘れなければならないのよ…ごめんね」

その女は、その『道』の中へと姿を消した。

とまあ、ファイと葉月さんの別れの後には、こんなことがあったんだ。ビックリだよね。

しかも、あの魔法は記憶をいじる魔法なんだ……。

でもこのことは、もしファイが心配して『葉月に会いに行く』なんて言われたら困るので、言わないでおくことにした。

そんなこんなであれから１０年という月日が流れた。

いま思い出せば１０年の間も、色々あったなぁ……。

葉月ちゃんの話を何時間も延々と聞かされたり……。
僕が葉月「ちゃん」て言うのが気にくわないってファイに怒られて、葉月『さん』って呼ばされるようになったり……。
耐えに耐えかねて、ストレスが爆発寸前になり、こっそり葉月さんに会いに行こうとするファイを必死で止めたり……。
本当に長かった……。でもファイはこの１０年で見事に国を再建したよ。

だからだろうね。『もう直、葉月を迎えに行く』ってファイが言ったんだ。

そこで！！　お先に僕は葉月ちゃん……じゃなくて…葉月さん……もう！　めんどくさい。
葉月ちゃんにかけられた魔法を解きにいってあげようと思ってこちらの世界へ飛んできた。

そして見事、『いじられた記憶をファイと再会する前にもと通り作戦』大成功！まっ、当然だけどね。
それで葉月ちゃんは今、記憶を引き出すのにかなりの体力を奪われたのか、その場で寝ちゃってる。

僕はこの隙に、葉月ちゃんが『僕と会った』っていう記憶をちょいちょいっと消して、

「また、今度ね」

そう言って、その場から姿を消した。

17：知らないのに…

葉月サイド◇◆◇

頭がすっごく重い。　私、今まで何してたんだっけ？

夕御飯作ろうと思って…それで…リビングで寝ちゃったのかな…。

でも…久しぶりにファイとの夢を見た…ような気がする。お別れする前のホンの僅かな思い出の夢。

それで……

そう！　今まで信じてきた過去とはまったく違う記憶だったんだよね…。

でも何で急に思い出したんだろう？

……何で、その夢が本当の記憶だと信じれる自分がいるのかな……？

何で違う記憶があったんだろう……。

うーん…、分からない。

寝ちゃってから…自分ではよく理解できないことが、また増えてし

まった。

もともと数え出したらキリがないほどあるんだけどね…。

駄目だ……こういうことは深く考えないでおこう。また頭痛が酷くなるのは嫌だし。

私は拾われた直後からの記憶しかない。

だから、昔は……おじいさんが生きているころは、『自分はいったい誰なのか』とか『どこから来たのか』とかよく考えている時期があった。

そして…考えが深くなるたびに頭が割れそうなほどに痛くなり、結局そういうことを考えることをやめるしかなかった。

まあ今までは『考えないようにすること』つまり『忘れること』によって、上手いこと乗り越えてこられたけどさ……。

こんな私って、やっぱりおかしいのかな…。

あぁ…こんなときにおじいさんがいれば、きっと何か助け船を出してくれるだろうにな…。

……。

せっかく大好きなファイとの大切な『記憶』を思い出したというの

に、1人でに気持ちが沈み込んでしまった、そんな時だった。

メキメキ、メキ……――――…バリン！！！

ピカピカに綺麗にされている窓ガラスが、一瞬のうちに豪快に…すべて割れた。

その先には、一人の青年が立っていた。

私を穴が開いてしまうんじゃないかってほど見ている。

それに表情はかなり焦っている……いや…驚いているのかな…そんな感じ。

急な出来事にかなり驚いた私は逃げようと思うも、腰が抜けたのかな…どうしても体が動かない。

ここから逃げなきゃ！！

そう私は思うのに、心の奥底では青年の存在に…何故か『安心』してしまっている。

「リリス！！！会いたかった……。もう、一生…会えな……　」

最後の方はあまり聞こえなかったが、そんな風なことを口にして、青年は私の方に走り寄ってきた。

「リリス、リリス――――――……」

何度もそう言いながら（誰かの名前かな…？）、彼は腰が抜けて地面に座り込んでいる私を思いっきり抱きしめた。

分からない。この人はいったい誰なの？

知らないよ、私、こんな人……。でも……なんだか、とても――――…

とても悲しくて、苦しくて、そして何より嬉しい感じがするのはどうしてかな…？

18：思い出したいよ。

でも、私はこの人の言っている『リリス』って人じゃない訳だし…ね。

とりあえず、このままだとの人が可哀想だし…人違いですよって言わなきゃ！

「……あの…すみません…。私、リリ…スさんじゃないです。人違いです、よ…」

すると私を包み込んでいた彼の手が離れた。じっと私の方を睨むようにして見ている。

肩を思いっきりつかまれた。

「リリス……覚えていないのか…？　俺だ、ルシファーだ……」

「ごめんなさい。私、その…分かりません……」

あまりに彼が真剣で…その上必死だったから、もう一度人違いですって言うことはできなかった。

しかも私の消えてしまった過去に関わった人だとすれば、『知り合い』の可能性はある。

「あの…私の名前は音野瀬葉月って言います。良ければ、リリ…ス

さん…って方を探すの、手伝いましょうか？」

私の肩を掴んだまま固まっている彼に、言ってみた。

正直、自分でも驚いてる。

なにか、この人には優しくしたい……好かれたいと思っている自分がいることを。

だからだよね。初対面（？）の人なのに、こんなことを口走ってしまうなんて…。

ほどよい沈黙の後、彼が口を開いた。

「お前が絶対にリリスだ。俺が見間違うはずがない」

「絶対に……？」

「ああ、絶対に、だ」

こうも断言されたら、私の忘れてしまった過去と関係があるのかどうか聞いてみたくなった。

「……あなたは私の過去に……私との関わりがある人ですか？」

…彼は何も言わずに頷いた。

「私、小さい頃の記憶が……ないんです。思い出したいと思うけど、

どうしても無理で……。だか…ら……うっ、痛っ！」

ズキンっと頭の奥に痛みが走り、倒れそうになった…が、彼が私を抱きとめてくれた。

そしてさっきまでとは違う、氷のように冷たくて低い声が聞こえてきた。

「……どうして…だ？　どうして俺たちばかり…こんな……」

「……」

私は彼に何を言えばいいのか分からない。

「許さない……。　こんな世界など、消えてしまえばいい」

刹那に、暗くて深い闇のような…ブラックホールのようなものが、彼から発せられる。

空気が一気に肌寒くなった。

怖い。今度こそ、この人から急いで離れなきゃいけない気がする。

……いや、でも……それはきっと…違う…ね。

私は彼の傍を離れたりしない。

なんで？　怖いんでしょ、早く逃げないと！

嫌だ……。

心の中で、自分と自分が言い争っている。

これは、もしかして…過去の自分と現在の自分なのかもしれない。

彼を知っている過去の私と、何も知らない今の私と。

そしてそれがごちゃごちゃになって、そのまま音になった。

「私、分からない。怖いよ…。嬉しくてたまらないのに、逃げたいよ…。あなたは誰なの？　でも知っている気がするの……。私、思い出したいよ……思い出したいよ……」

だんだんと眼の焦点が合わないようになってきてる。

思い出したいと強く願ったからかな、頭が割れそう……すっごく痛いよ……。

そのまま意識が薄れていった。

19：憎い人

カインサイド◇◆◇

人目を避けるために、葉月ちゃんがいた場所からずいぶん離れた所にある山奥まで来た。

やっと帰れる…。まあそんなに時間はかからなかったけど、かなり疲れた。

魔法使うのって、かなり体力を消耗するんだよね。

ただでさえ、こっちの世界に来るのに物凄い量の力を使うのに、葉月ちゃんの記憶まで呼び起こしたんだから……そりゃ僕でも疲れるはずだよね。

「さっさとこれ（魔法陣）書いて帰ろっと」

そう呟いた直後だった。

「……えぇ？！なんで？！！！　」

いきなり、この世界に存在するはずのない気配が……。…これは……この冷たい気配は間違いなく『魔王』だ。

どうしてこの世界に…？

しかも、多分だけどさ……今、葉月ちゃんの近くにいる……。

とりあえず、戻ってみないと駄目だな、こりゃ。

あーあ、あと少しで帰れるはずだったのに。

『魔王』に…近づくにつれて、とても人間とは思えない、圧倒的な存在感が肌からひしひしと伝わってくる。

葉月ちゃんの家が見えてきた。やっぱり……そこに…いる。

自分の気配を全部消し、息すらしないようにして、近づく。

声が聞こえてきた。

「……どうして…だ？　どうして俺たちばかり…こんな……」

この声が……もしかして…魔王かな…？

窓ガラスが粉々に砕け散っている。急いでその先を見る。

葉月ちゃんは何者かに……いや、男に抱きかかえられている様子だった。

そして……その男の顔が見えた。

ああ、きっとこれが魔王だ。…やっぱり僕の大嫌いな顔によく似ているな……。

「許さない……。こんな世界など、消えてしまえばいい 」

今までより何倍も上回るほどの殺気が辺りを喰らいつくした。

さすが魔王、やっぱり彼の力は膨大だな…って、そんなこと考えてる場合じゃなかった。

葉月ちゃんが危ない！！

駆け寄ろうとした瞬間、葉月ちゃんの声が聞こえた。

「私、分からない。怖いよ…。嬉しくてたまらないのに、逃げたいよ…。あなたは誰なの？　でも知っている気がするよ…… 」

…葉月ちゃんはそのまま頭を抱え込むかのようにして意識を失ってしまったようだった。

間に合わなかった…。

魔王、お前は絶対許さない…。ファイの大切な人を何人も、何人も傷つけて……。

しかも僕が何よりも憎くてたまらない人と瓜二つの存在。

『消したい』と思ってしまうのは、当然だよね。

いつもは冷静に乗り切れるはずなんだけどな……

「魔王、お前葉月ちゃんに何をした！　」

いろんな感情と、なによりファイの（僕も）大切な大切な葉月ちゃんを傷つけたという怒りで我を忘れてしまった。

２０：気安く触るな

魔王は僕が現れたことに微塵も驚きはしなかった。葉月ちゃんを抱きかかえたまま、黙ってこちらを見ている。

その態度に余計に腹が立つ。

「……その子を離せ　」

魔王から葉月ちゃんを奪い取ろうと瞬間的に接近した。

が、目の前に二人の姿はない…。代わりに後ろから僕の喉元に刃物の先が当たるのを感じた。

……葉月ちゃんを抱えていたのにも関わらず……早い。この僕でも見えないなんて…。

本当に人間なのかな、魔王って……。

「早く刺しなよ。その隙になら…葉月ちゃんを安全な所へ移せる　」

さっきの書きかけ魔法陣があるし、その辺くらいまでなら、一瞬で人一人十分移動させられる。

どんとこい。そんなことを内心で呟いていると、ようやく魔王が口を開いた。

「てめぇ、ガラムの人間だろ…。さっさと消え失せろ。そうするなら、見逃してやってもいい 」

こういう上から目線のやつは大嫌いだ。自分がなんでも一番だと思うなよ。

「嫌だね。こうなったら、葉月ちゃんを一人にしておけない。連れて帰ることにするよ 」

「……お前、リリス……いや、この子のことを知っているのか……？ 」

『リリス』って名前、ちゃんと聞き逃さなかった。

……どっかで聞いたことあるような、ないような名前だな…。

「知っているよ。……この子はね、とても『大切な子』なんだ 」

一向にその剣（刀かな…）で刺そうとしないので、こっちから攻めることにした。

間を置くことなく振り返り、小さく屈んだ。そして葉月ちゃんに移転させるための呪文をかけるため、おでこに手を触れようとしたら……。

魔王の刀が葉月ちゃんに触れようとした手に振り下ろされた。

「気安くリリスに触るな 」

一瞬、手首から下が切り落とされたかと思った…。さすが僕だね。間一髪、ぎりぎりセーフだった。

「お前、近いうちに殺してやる」

その言葉が僕の耳に届くころには、2人の姿はもうどこにもなかった。

自分しかいなくなってしまった部屋を見渡しながら、独り言。

「あーあ、どうしよう…。これってやっぱりファイに話した方がいいのかな…」

でも話したら、すぐにでもこっちの世界に来そうで怖いな……。

21：笑って

葉月サイド◇◆◇

前も後ろも真っ暗で何も見えない。

暗い闇だけの空間で安心感と、心地よさと……。そんな暖かさに包まれているような気がする。

あ、……声が、頭上からか…足下からか…どこからともなく降ってきた。

「……ス、リリス、リリ……」

誰かが私を呼んでいるんだ。早く行かなきゃ。

えっ……私…？　…違う、私を呼んでいるんじゃない。

じゃあ、誰を呼んでるの？　ここには私…しかいないよ……。

……私ってなんなの…？……誰なの？

分からない……分からないよ……。

また頭痛がひどくなってきた。

…痛い……痛いよ…。

でも…この痛みが治まってきたら、また『私』のことを考えてしまう。…そしてまた激痛が走る。

さっきからそんなことばかり繰り返している。

しかもね…ぐるぐると回っては止まる私の思考と、何度も私を襲う頭痛によって奪われた体力は、もう限界が近いと思う。

誰かここから救い出して…。

すると、さっき降ってきた声が聞こえてきた。

「……絶対…離さ…い……絶対に……」

途切れ途切れだけど、その言葉は胸に、心に、体に沁み込んでいく…。

そしてその声に引っ張られるかのようにして、ぼんやりと視界が広がっていく。

見えてきたのは満天の星が光り輝く空と……私を抱きしめている男

の人。

この人は…さっきの……。

身じろぐと、すぐに体を離して顔を覗き込んできた。

「大丈夫か…？　どこか、痛いとこ…　」

「あんまり怒っちゃいけないよ！　怒るってことは素敵な感情でもあるけど、行き過ぎたら人を困らせてしまう感情でもあるんだよ…　」

意識が途切れる直前に、彼はとても怒っている様子だったから…つい言ってしまった。

「……　」

何も言わない彼に、もう一言。

「しかも…ね、笑っていた方が、幸せになるんだよ　」

この時、無性に…私のとびきりの笑顔を彼に見せたくなった。

おじいさんが『誰にでも笑顔だ』って言ってたし、そうしたら、この人もきっと笑ってくれるだろうと思ったから。

……頭痛も治まっていないし、いろんな事がいっぺんに起こりすぎて、とびきりいい笑顔はできないけど。

自分の中で思いっきり笑ってみた。

22：違わない。

「…覚えていなくても、……リリスは、リリスのままなんだな……
」

「…えっ……？　」

「例え俺のこと忘れていても…忘れたままでも……愛してる、リリス　」

そう言い終えると、不意に…だんだん顔が近づいてきて……彼は私にキスをした。とても優しいキス……

って！！　何のん気にそんなこと言ってんの、私！

しかも……この人多分、勘違いしたままだよ！！

「…んっ……　」

無理矢理に離れて、急いで言う。

「多分……私じゃないですよ！　リリ…スさんと私は違いま……　」

「違わない　」

即答して……彼は、私の前ではじめて笑った。

そしてまた、彼は私の唇を…今度はやや強引に塞いだ。

それでね、その拍子に……私……今まで（現在進行形）、…彼の膝の上に乗っかってること（しかも、彼の腕が腰に巻き付いてて動けないよ…）に気づいてしまったんだ。

必死にもがく私。それをいとも簡単に抑え込んでしまう彼。

それでももがき続けた私の努力の甲斐あってか、彼はゆっくりと離れていった。

「リリスに嫌がられるなんて、初めてだ……」

「だから、私は葉月ですって！」

彼はまた笑った。

「とにかく、私を降ろしてください」

「俺の言うこと聞くなら話してやってもいいが？」

この人は今、冗談を言ってるのかそれとも本気なのか…分からないから、怖い。

しかも、その『言うこと』がとんでもないことのようで、怖い。

とりあえず、ここは言い返しておく。

「『言うこと』によります」

「俺のこと、ルシファーって呼ぶこと　」

なーんだ、たいしたこと、ないや。…よかった。

「そんなことなら、お安いご用です　」

「あと、敬語を止めてくれ。…普通に…普通に話してくれ…　」

そんなことも、朝飯前だよ。

「分かりまし…分かったよ、任せて…えぇっと、ルシファー？　」

「ありがとう　」

そう言って、すんなり膝から降ろしてくれた。ちょっと意外。

『まだ離したくない』とか言うと思ったんだけどな……。

２３：意識のない間に…

『まだ離したくない』とか言うと思ったんだけどな……。

……って、何考えてんのよ、自分！

そんなだったら、私が名残惜しそうな感じになっちゃうよ…。

…顔が急に熱くなってきた。

それを隠すために、すっと立ち上がって私の顔が見えないように上を向く。

……別のこと考えよう。別のこと……別の……。

そうだ！　これからお友達になるなら、私も彼に頼みたいことがある。

話しかけようと思い、彼を見る。

「…あの…せめて、ね……私のこと『葉月』って呼んでほしいな？」

「……どうしても、そう呼ばないと、駄目か…？　」

私を見上げる彼……ルシファーの灰色の透き通った瞳の中に、悲しみのような苦痛のようなものを感じた。

そんな目をしている人に、私は『どうしても嫌だ』と言うことなんてできない…。

「……分かった。別にリリスって呼んでもいいよ。…でも私の名前、忘れないでね…？　」

「…ああ、忘れない　」

その時、ルシファーが一瞬複雑な顔をしたのを、私は見逃すことができなかった…。

やっぱり『葉月』って名前、嫌いなのかな…。

私が思ったことに感づいたのか…ルシファーはそれを誤魔化すかのように、立ちあがった。

今度は私が彼を見上げる。

そのさきに、美しい星空がまた見えた。

こんなに綺麗に見えるんだから、きっと私の家の近くではないよ…ね。

因みに…回りは大きな木々に囲まれている。山奥かな…。

…かなり…不思議に思ったので…聞いてみる。

「そう言えば……ねえ、ここ何処なの？　」

「ここは……ガラム王国だ。…って言っても分かんないよな…　」

ルシファーは私から視線を逸らした。

「……なんか、聞いたことあるような…ないような感じ…　」

独り言のように呟く。

「……。……リリスが『自分の故郷』に来たら、何か思い出すような気がしてな……。逃げるついでに連れて来た　」

思い出す…か…。過去がない、ということで私がもし、万が一『リリスさん』であったとして、そういとも簡単に思い出すことができるだろうか。

今まで何年も…何年も思い出さなかった記憶を……。

「私が、リリスさんじゃなかったらどうするのよ…。しかも連れてきた…ってことは、時間的に考えて……ここは日本国内なの？　」

……。長い沈黙が…流れた。

「……違う。異世界だ　」

「い……い…異世界??」

……異世界って、なにか、聞いたことある…よね…。

２４：これだから、嫌いだ。

ファイサイド◇◆◇

山積みにされたガラム国各地の報告書。

それによれば、ほとんどの村や町が復興できていることが分かる。

この短期間でこれほど復帰できたのは、ひとえに人々の心が一つになったからこそなし得たことである。

しかし…魔王の力が発動された場所の近くは未だ人が寄りつこうとしない。

あの場所を見れば、思い出してしまう……からだろうな。

多くの人が一瞬のうちにして消えてしまったことを。

ここに住むすべての人間は、魔王を許しはしない。絶対に……。

……。

そんなことを考えていても、前に進まない…な。

一度、心を無にして別のことを考えてみる。

……そういえばカインはどこへ行ったのだ？

カインは……何処かへ行かなければならない用事などがある時は、必ず僕に言ってから出かけるはずなのだが。

もう半日ほど顔を見ていない……。

あの『王の虐殺』があってから、カインはより一層僕の身辺警護を増やすようになった。

僕は必要ないと言ったのだが……。

『葉月ちゃんに会う前に死にたいの？』とかなんとか言われてしまえば、聞きいれる他なかった。

それからというもの…就寝時には、ドアの外にカインがいるのは当たり前のようになり、僕が一人で出かけることなど断固阻止されたのだった…。

そんな奴がいきなり、それがたとえ半日とはいえ、いなくなるということは気味が悪い。

探しに行ってみるか……。

そう思いつつ、ドアノブに手をかけると、

「もう、ファイ様も立派な成人。一刻も早く結婚していただかねば

なりません……」

「…今まですべての縁談を断っていられるが、このままだとお世継ぎが……」

そんな会話が聞こえてきた。

近頃、周りの者どもが早く婚約しろ、だの世継ぎが…だの、うるさい。

確かに、王となり実務をこなすだけではいけないのだ…。

『次の世代』に繋げていかなければならないのも分かっている…。

だが、僕が愛しているのは葉月だけ、だ。

それは、きっと何が起きても変わることはないだろう…。

葉月と別れたばかりの頃は、時が立てば、このつらい気持ち…『会いたい』と願う気持ちも、少しは和らぐかと思ったのだが……。

日に日に、その気持ちは増して……最近は…会いたくて、会いたくて仕方がない。

『完全にこの国を立て直す』ことはまだできてはいないが、もう迎えに行ってもいいのだろうか……。

すると、別の声が聞こえてくる。

「ファイは、もうすぐ結婚するからご心配なく　」

この声…喋り方は間違いなくカインだ。

「ファイ様を呼び捨てにするなど、お前はつくづく恩知らずの無礼者め！　」

「そうじゃ！　ここはお前などが本来いることもかなわぬ場所。それを許すファイ様になんという仕打ち……　」

僕の口から大きなため息がでる。これだから頭の固い連中は嫌いだ。

…ファイもああいう奴は、放っておけばいいのだが……。

間もなく、僕は部屋を飛びだした。

「お前たち、人の部屋の前で喚くな。うるさい　」

「ファイ様！　申し訳ございません　」

じいさん二人が深々と僕に頭を下げる。

カインは…その二人の後ろで……僕に手を振っている…。

……少しは、場を弁えろ！と言いたい。

「この者は私の友人でもあるから、名を呼び捨てにすることなど、当り前であろう？　」

「……しかし…　」

少し顔を上げた奴が言う。

「僕には…主には一人の友人もいらぬと申すか？　」

「申し訳ございません　」

「……さがれ　」

二人はもう一度頭を下げると、そそくさとその場から立ち去った。

25：決まっている

とりあえず、さっきまでいた部屋に戻る。

「今まで、どこで何してた？」

「それがね、大変なんだ！！　…でも…はじめから話したら、物凄く長ーくなるんだけど…ね……」

カインは昔から…どちらかというと話下手だ…。

どうしても細かく話してしまう癖のようなものがあるので、報告や何かの説明…など、一度喋り出したら止まらないことが多々あった。

それを踏まえ、さらに今回は自分で『長い』と言うのだから、相当長いのだろう……。

「なるべく短めに、単刀直入に頼む」

「単刀直入…にいうと………葉月ちゃんが魔王に攫われました……」

…………………。

言葉の意味が上手く捉えられないので、心の中でもう一度呟いてみ

る。

葉月が……魔王に攫われた、……だと？

……何故、葉月が魔王に攫われたのかは察しもつかないが、今はそれを考えている余裕なんてものはない。

躊躇なんてしている暇などない。

今すぐ会いに……探しに行かなければ…。

「……今から探しに行く。どこにいるか、カインならだいたい分かるだろう？　教えてくれ」

「……。　ここにいるよ、多分……」

「ここって言われても意味が分からない。　どこにいるのだ？」

いつもなら考えられないが……自分でも分かるほどに焦っているし、イラついている…。

そんな僕の雰囲気を感じ取ったのか、カインの目つきが変わった。

さっきまでのとは比べ物にならないほど、冷たく、冷めた目つきだ。

「葉月ちゃんはこのガラム王国に連れてこられている。僕も止めようとしたけど、駄目だった。……さすがは僕の兄さんって感じかな」

……そうだった、な…。

カインは魔王『ルシファー・エデン』の母親違いの弟だった。

エデン一族はこの国で唯一魔力を持つ人種だ。

その一族との血の繋がりがあるからこそ、カインは魔法を使えるし、ルシファー・エデンはあの『偉大な力』を発動し、魔王となったのだ。

嘗て……ルシファーはまったくといてもいいほど魔力がなかったため、群を抜いて魔力に秀でたカインが正統後継者となる話が上がりつつあった。

しかし、『隠し子』であるがために、カインが後継者になることを祝福する者など誰もおらず、愚痴や小言を毎日のように言われ……殺されそうになったことなど、数えればキリがないほどあったらしい……。

そして…カインは逃げ出した。

母を…無理やりに孕ませた父と、会ったことも見たこともない兄を恨みながら……。

その逃げている最中、僕とカインは出会った。

……そして、（色々あったことは省くが）今に至る。

「……そうか…。どの辺かは、分かるか？」

「シギの森の近くだよ…。今行ったら間違いなく戦闘になると思うけど……それでも行く？」

…そんなことは決まっている。

「当たり前だ」

26：森の中

葉月サイド◇◆◇

ここは異世界……彼が言うには『私の故郷』…だそうだ。

そんなはずはないと、思いつつ……。

今、私は知り合ったばかり（じゃないかも？）の青年、ルシファーに手を引かれながら、森の中をスローペースで歩いている。

はじめ彼は歩けそうもない私を見て、抱いていく（つまりお姫様だっこ…）、と言った。

もちろん恥ずかしいし、重いし、その他もろもろで断固拒否。

それで、心配させるのは良くないと思い、1人で歩けるって言ったんだけど……。

無理だけはしないでくれ…。…せめて…頼む……。と深刻そうな顔で言われ、手を差し伸べてきたルシファーを断ることなど出来ず、結局手を繋いでいる。

そういえば手を繋いだのって、何年ぶり！？　……以外に緊張してしまっている私…である。

おかげで先ほどから変な汗が噴き出てくるし、会話すらない妙な空気が漂っている。

違うこと考えて、気を紛らわそう！

うーん……異世界なんて言われて簡単に信じてしまっているけど、今まで見た景色の中に『異世界』を強調する物はなく、なんら私のいた世界と変わりない。

『ここは異世界だ』って証明できるものがなければ、本当は信じられないはずなんだけど、ね…。

『ファイがいる異世界』が頭の中を過る。

そうだ！　もしかしたらこの世界がファイのいる世界かもしれない。

もしここがその世界だとして、ファイは一国の王子様なのだから、ルシファーが知ってる可能性高いよね…。

そう思い、言葉にした。

「ねえ、ルシファー……ファイって人知ってる？　」

ルシファーは少し間が開いてから答えた。

「……知ってる。確か……最近即位した王の名だろ……。でも……なぜリリスがそんなこと知っている？　」

手を握る力が強くなったので、顔を覗き込んで見る。……豪快に眉間にしわが寄って、…もしかして……物凄く怒ってらっしゃるのかも……。

「…えっと、ね。ファイは私の大……お友達、だからかな……」

なんとなく……ルシファーの前で『大切な人』とは言えなかった。

「……」

……何も話さない。

深い殺気の様なものが、繋いだ手から伝わってくる。

……人を殺気で殺せるなら、私はもう死んでる…よね…。

…こんなルシファーは…怖い…な…。

今までに彼に対して幾度か感じた『怖い』。でも毎回、決して離れたくはない……。

傍にいてあげなきゃいけない気がするの。

もしかしたら…私は…本当にこの人を……知っている……？

27：再会

もしかしたら…私は…本当にこの人を……知っている……？

ズキンッ！！！！

また、頭痛が襲ってきた。

「うぅ……っ……」

痛さに耐えられず、声が漏れる。

「大丈夫か！？　…だから無理するなといたのに」

先ほどの怖さは微塵も感じられない声音。

そしてルシファーはひょいっと私を横抱きにした。

……ダメダメ、と首を横に振る私。お姫様だっこは…嫌だ。絶対重いはずだから。

「…大丈…夫だよ…」

自分の声が頭に響いて痛みが酷くなる。でも言わなきゃ…。

「……1人で…歩ける」

抵抗らしい抵抗は出来ないが、必死に降りようともがく。
そんな私のおでこに……ルシファーは自分のおでこをくっ付けてきた。
かなり近い位置に彼の顔がある…。
「駄目だ。そんなに苦しそうにしているリリスを、歩かせるような図太い神経は持ち合わせていない 」
言葉に多少棘がったが、ルシファーの……優しさが伝わってくる。
すっと顔を離す彼を見つめる。その穏やかな顔つきに、さっきの『怖い』は感じられない。

結局私は彼に横抱きにされたまま…無言のまま…随分と時間が流れた。

そしてある時、急にルシファーの体…私を抱える手に力がこもった。
大分長い間、私を抱き上げていたんだし…やっぱり疲れちゃったのかな……。
「…疲れた…なら、遠慮なく…降ろして…ね 」
長い時間喋っていなかったからか、思いのほか自分の声が掠れてい

る。

「そうじゃない。誰かがこちらに向かってくる…」

深刻そうに言う。

「……これは……さっきのガキと……」

言い終わる間もなく、突如、突風が吹き、竜巻のようなものが私たちを囲った。

その風が強くて、とても目を開けてられない。

今私が頼れるのは聴覚だけだから、よーく耳を澄ましてみる。

風の流れる音……と一緒に、ルシファーの声も聞こえてきた。

「こんなもので、俺が捕まるとでも思っているのか…？」

一瞬で……その風の音が止んだ…。

ゆっくりと目を開けてみる。

……視界に入ってきたのは、可愛らしい少年と……あれは……！

…ファイだ……。

あの頃より少し……いや、かなり大人びたファイがそこに立っていた。

28：低い声

両者が何も言わず、睨み合い、辺りは重い静寂に包まれていた。

「…葉…月……。会いたかった……会いたかった……」

そんな中、ファイはこの張り詰めた空気にそぐわない言葉を発した。

あのころより随分と低くなってるけど、ちゃんと本人だって分かる声で……会いたかった、と。

感動の再会に思わず私も叫ぶ。

「私、も…会いたかっ――――！！」

突然、今まで優しく抱きかかえてくれていたはずのルシファーの腕が息ができなくなるほど強く私を抱き締めたせいで言葉が続かない。

「…うぅ…っど……し…たの…？　……ル…ッファー、苦…し…よ……」

肺の中にある空気を振り絞って声を出すも、途切れ途切れで、自分でも何を言っているのか分からない。

「…それ以上、何も、聞きたくない……何も……」

聞こえるか聞こえないか分からないほど小さな声で、ぼそぼそっとそう言いながら、より強く、抱き締められる。

ホントに、どうしちゃったんだろ！？

身動きは全く取れないけど見ることはできるから、なんとか視線をその表情に向けると…。

なんだか…凄く…怯えてる。

凄く…悲しそう。

「魔王っ、葉月を離せ　」

ファイが急速に間合いを詰めて、ルシファーに掴みかかろうとしたその時。

「ファイ！！　離れて！！　」

カインの叫び声が響いた。

29：悪魔と魔王

カインサイド◇◆◇

葉月ちゃんが苦しそうにしているのを見兼ね、ファイは急速に間合いを詰めて、魔王に掴みかかろうとした時。

魔王の急激な力の波動の増大に、魔力の解放（つまりもの凄い攻撃をされる前触れ）を察知した僕はあわてて声を出した。

「ファイ！！　離れて！！」

が…、少し遅かった。

――――…バキバキバキッ！！！！！

地面が裂ける音とともに、突如僕たちに向かって来るようにしてできた亀裂から、黒く透明がかった手が何本も伸びてきて、ファイに巻きついている。

……これは……。

この魔法は『悪魔』とある契約を結ばなければ、使えない禁忌の召

喚魔法だ……。

こいつは……魔王は、悪魔に心でも売ったのだろうか。

そうでなければ、こんな魔法、使えるはずがない…。

…いやいや！！　今はそんなこと考えてる場合じゃない！！

…って、もうすでに自分の足にも薄気味悪い手が何本か巻きついてるんですけど！

「……消えろ……」

魔王の鋭い目つきと共に、微かに聞こえたその言葉。

それを合図にするかのように、僕もファイもズルズルと亀裂の方へ引きずられていく。

亀裂の奥深くにはきっと…悪魔がいる。このままだと、かなりまずい。

…一か八か、あの魔法を使ってみるか。

僕はこの世とはおさらばになっちゃうけど…まあ、ファイと葉月ちゃんさえ助かればいいんだし。

…魔王にもひと泡吹かせたいし、な…。

そう決意し、その魔法を発動させようとした、その時だった。

抱きかかえられていたはずの葉月ちゃんが魔王の腕の中から消え、一瞬のうちに空中に姿を現す。

すると僕たちに巻きついていた手たちがブルブルと震え始め、

『ぎゃあぁぁぁ――――…』

という悲鳴とともに、亀裂へと帰っていく。

さすがっ葉月ちゃん、じゃなくて!!

…なんで？　どうして？　悪魔は神様しか追い払うことはできないのに。

30：目覚め

悪魔が消え去った後もなお、宙に浮き続ける葉月ちゃん。

何だか、様子が…変だ。

そりゃ…本体ではないにしろ、悪魔を追い払ったっていう神業を披露した訳だし。

おかしいはずなんだけどさ。

……雰囲気が違うっていうか、漂ってくる空気が重いっていうか…。

するといきなり、俯いていた頭が魔王の方を向いた。

その少し怖い笑みを浮かべた顔は葉月ちゃんのはずなのに……まるで別人だ。

「……相変もわらず、お前はクズ以下よの～」

声も低くて、本当にこの子は葉月ちゃん!?って思ってしまう。

「カオス!!!」

思いっきり……そりゃもう魂を一瞬抜かれたような感じで魔王が驚

いてる。

ざまあみやがれってんだ。魔王もいい気味〜☆

……それより、カオスって誰？　かっこいい名前だなぁ。

……。

カオスって……。

ええぇぇえ！？　まさか、あのカオス！？？

でも、悪魔も追い払っちゃったし……。

カオスの名前で思いつくの、このお方しかいないし……。

……ええっと、その……『神様』の　カオス！？！？

葉月ちゃんが？？　一体どういうこと？？　…誰か説明よこせー！！！

「リリスを苦しめる方法しか知らんのか？　ふっはっはっは！！
ワシが出てこなんだら、またお前はリリスを泣かせるところだった
」

「黙れ　」

よく分からないけど、いいように言われて魔王の怒り爆発って感じだけどさ、相手が神様の『カオス』だったとしたら、いくら魔王でも…敵わない。

それで……もしこの場所で戦闘が始まったらきっともの凄いことになる。

…一瞬でファイ連れて逃げれるようにしとこっと。

「ほぉう、クズが一丁前にこのワシに口答えだと？　笑える、笑えるぞ、ルシファー！　」

高々な笑い声が鼓膜を刺すようで、耳を塞ぎたい。

「…今までリリスの中でのん気に、ただただ暇を持て余していた奴が今頃になって出てきて俺に説教か？　それこそ笑える　」

魔王全然顔笑ってないよ…、ってツッコミいれたい。

「ワシがのん気に暇を持て余していた、だと？　リリスの体にワシが移しかえられた本当の意味すら知らん奴がよく言う　」

「なん…だと？？　」

「馬鹿もほどほどにしておけよ。あまり度が過ぎると、……殺してやるわ　」

そう言って一瞬で魔王の目の前に現れたカオスに、あわや戦闘開始か！？と思ったのもつかの間、小さな嗚咽が聞こえた。

「…ぅっ……す…けて…　」

一瞬で雰囲気もおそらく元の葉月ちゃんのものだし、重たかった空気もなんとなく軽くなった。

しかもこの気配は絶対……確信はないけど、絶対に葉月ちゃんだ！

今だ……！！

一瞬の隙を見て、僕は迷うことなく移転魔法を発動し、ファイと葉月ちゃんを連れてその場を離れた。

３１：移転魔法　（前書き）

ある１人の方が私へのエールをくださいました。
それを見て、また目が覚めました。本当にありがとうございます。
私は本当に弱い人間で、気が一度滅入ってしまうとなかなか立ち直ることができません。
このお話を読んでいる皆様、何度も何度も申し訳ございませんでした。
また、このように何も書けなくなってしまう時期が来てしまうかもしれません。
ですがどうかまた気長に見に来てくだされば嬉しいです。
我儘の絶えない作者でごめんなさい。
幸紀涅

31：移転魔法

王の間、つまりファイの部屋にきらめく閃光がはしった。宙に現れる3人の姿。

「ふぅー、移転成功　」

二人を連れて、無事生還。咄嗟の移転魔法にしてはなかなかの出来栄えだ。

だってちゃんとお城まで帰ってこれたんだし。

「葉月は無事か！？　」

地面に足がつくのと同時に葉月ちゃんのもとに駆けつけるファイ。

完璧な魔法を成し遂げた僕にお礼を言うまでもなく、やっぱりファイは葉月ちゃん命だねー。

とほほ。まあ、どこまでも一途なところがファイの長所だけどね。

ファイが揺さぶっても起きない葉月ちゃんに、死んでしまったのかと、目を覚ましてくれと、そう叫ぶ泣きそうなファイが（いや、もう泣いてるか！？）可哀想なので一言。

「今はまだ気を失ってるみたい 」

それを聞いて少しは安心したのか、思い切り葉月ちゃんを抱き締めるルシファー。

「…っき……は、づき…葉月…… 」

そう言いながら、ルシファーは葉月ちゃんにキスしようとしてるし！！

おーい、まだ僕ここにいますけど…。ちょっと、なんだか恥ずかしいんだけど！！

いやいやいや、感動の再会&イチャこいてる場合じゃなかったんだった。

魔王がいつ現れてもおかしくないのに！！すぐにまたどこかに移転しないと！！…って、

「あれ？　おかっしいなー 」

辺りを見渡しながら言う。

気絶している葉月ちゃんにキスしまくって気が済んだのだろうか、独りごとで終わってしまうはずだった言葉にファイからの返事があった。

「どうした？　」

「魔王も移転魔法使ってすぐここに現れると思ったんだけどな。単なる数秒の時間稼ぎにしかならないと思ってたのに……　」

そう言い終わってすぐ、それは突然のことだった。

気を失っていたはずの葉月ちゃんが、ファイの腕の中で目を閉じたまま音を発した。

「……それなら心配いらぬぞ　」

「葉月？！　」

「葉月ちゃん！？　」

３２：王様らしくない王

「ワシは葉月ではない　」

葉月ちゃん…ではない……さっきのカオスとかいう奴がファイの腕の中で目を見開いた。

笑いながら。

ファイは今まで優しく抱いていた力が急に強張った。

「葉月を返せ　」

目が本気だ。

視線で人が殺せるのなら、すでにもう見られた人は死んでしまっているだろうほどの強い視線。

うわー、こんなに怒ったファイを見るのは久しぶりだ。

……今、ファイの心のうちで蠢いている感情は決して穏やかではないだろう。

恐ろしいほどの憎しみが湧きあがってきてもおかしくない。

大好きな、大好きな……愛おしい、何よりも大切な思い人との『未来』のために日々努力してきたファイ。

忌むべき魔王に壊された世界の半分の復興というのは、それはもう困難なことで…。

それをほとんどファイ1人で成し遂げたといっても過言じゃない。

頭の固い爺どもをなんとか動かし、多大なるお金を集め、復興のための作業に自らも参加する。

汗にまみれ、泥まみれになって、かすり傷や痣などはしょっちゅう作った。

それを約10年間、ずっと、ずっと繰り返した…。

王様らしく堂々とはしているのに、彼がすること成すことは王という座からでは考えられない前代未聞なことばかり。

ファイはガラム王国の王としてではなく、一人の人間として全力を尽くしていた。

そんな彼に周囲は感心し、感動し、協力したいと自ら思うようになった。

最初は非協力的だった貴族の爺どもも、頭の固い兵隊も、金に目のない町人も、貧乏な人も、家族を魔王に消された人も……。

この世界で生きる者は皆、彼を敬い感謝している。

でもその全力が尽くせたのも全て彼女…葉月ちゃんの存在があったからこそ、なのだ。

色んな事に耐えて…耐えて、耐え過ぎて限界の糸が切れそうになり、葉月ちゃんの所に会いに行こうとしたことなんて何度もあった。

それでもファイは必ず『復興させるまで会えない』って考えを貫いた。

――――全ては愛しい人との約束のため。

それなのに葉月ちゃんは魔王に攫われ、内側には得体のしれないカオスがいる……。

ようやく…やっと果たした感動の再会を、今すぐにでも殺したい魔王とカオスに邪魔されて。

さっき思い存分キスしたとしても（↑嫌味）、平然といられるはずがない。

３３：その名の通り

「やめろ、ファイ！　」

ファイの目を見ながら心に響くように言う。

――――彼女から離れて。

彼女は葉月ちゃんじゃない。得体の知れないものだ。

もし彼女が名だけのカオスではなく神としての『カオス』だとしたら…。

僕たちなんて一瞬で消してしまえる。たとえ人間の姿形をしていようとも、だ。

用心に越したことはない。ここは怒らせないのが得策だよ。

通じたのか否か。それは分からないけど、ファイの彼女をつかむ力は弱まった。

「先ほどルシファーが言っておったではないか、カオス、と　」

くっくっくっ…そう笑いながらファイの腕を解き、立ち上がってこちらを見たカオスは、葉月ちゃんの顔なのに…やはりどこか掴めない偉大さをかもしだしていた。

人間の体の中に居るからだろうか？

彼女の体から魔力があふれ出ている。

その魔力はただ溢れているだけなのに、僕やファイの体の温度を下げてゆく。

人間では考えられないほどの魔力の強さ、威圧さ。

もう…神としか考えられないが、ただ単に魔力がずば抜けているだけかもしれない。

そういう意味でなら、魔王という実例もいるわけだし。

物事の道理を推測だけで判断を下すのはよくない。

ここは確認のためにも、神か否か……聞くべきだろうと口を開く。

「それは名だけのカオス？　それとも神としてのカオス？　」

「そなたのような魔力ある人間は察しが良いはずじゃ。なぜそのようなことを聞く？　聞かずとも、分かっておろう　」

「一応だよ、一応。　推測だけであなたを神としてしまうのは御免こうむりたいからね　」

「往生際の悪い奴じゃのう。　では真実を言ってやろう。　お前さんの推測の通り、我は神王の1人であるカオスじゃよ　」

すると、隣にいたファイがいきなり叫んだ。

「カオス……神王であろうとも何でもいい。　さっさと葉月を返せ　」

「威勢のよい人間だな！　そなたのような命知らずの輩はいつの時代も面白いものよ！　」

またもや大声で笑い出すカオス。どこがそんなに面白かったのかな…。

「そなた、葉月を愛しておるのだろう？　しかし、残念じゃが、葉月はお前の所には帰っては来ぬ　」

「…どういう意味だ　」

「言葉の通りじゃよ、青年　」

…ファイを挑発して、からかっているようにしか見えない。

――――つまり、どんなことを言おうが、ファイが葉月ちゃんの体は

絶対に傷つけないことをちゃんと分かって言っているのだ。

性悪な神様だね…ホントに…。

って、そうだ！　今はこんなのん気にしていられないんだった！！

３４：今の『一番』

急いで口を出す。

「そんなことより、どうして魔王が追ってこないのさ！　」

「そんなことではな――――…！！　」

言い返そうとしたファイをこれでもか、っていうくらい睨む。

そしてファイの耳元に顔を近づけて、言う。

「ファイ？　ちょっと黙って　」

一間おいて、いつもの僕からじゃ想像できない低い声で続ける。

「そりゃあ、一番は葉月ちゃんのことを考えるのがファイだけど。いい加減、今の『一番』は魔王から葉月ちゃんを遠のけるってことに気づいて　」

聞き終えたファイは唇を深く噛み、その手のひらから血がにじむほど拳を固く握った。

ファイがこの行動をするときは、いつも強い…大きな『我慢』をするときだ。

その行為を見るたびに、今の僕は不甲斐ないと実感する。

それでも…今の最優先事項を見誤ってはいけないから。

カオスの方に向き直ると、彼女はすぐに話し始めた。

「呪いをかけた故、いくら魔王と罵られる輩であろうともそうすぐには目覚めんよ 」

呪いって…、

「そんな…いつの間に？ 」

「あやつ…ルシファーと対峙した時じゃ 」

さすがは神王、ぬかりない。

でも魔王に対してだし…いくらカオスの呪いでも、すぐに解けるはずだよね…。

その時不意に、カオスと目が合った。

「小さいの、わしの力を愚弄するなよ 」

えっ？ 今僕喋ってないよ…ね。

……考えることはすべてお見通しってわけか。

このままカオスと目が合ったままでいるのは気味が悪いので、目を反らした。

「まあ、ルシファーの心次第なのじゃが…強いて言えば早うても半月、遅ければ永遠にうつつを抜かしておる　」

あの魔王をそこまで追いつめられるなんて、いったいどんな呪いなのだろう。

さっき『目覚めんよ』とか言ってたし、『うつつを抜かしておる』とも言ってたわけだから、心でも奪ったのかな…。

もうこの際なんでもいいから、永遠に眠っててほしいな。

そうすれば、すべてがうまくいくのに…。

そこでまた、心を読んだのであろうカオスが言う。

「しかし永遠に眠っておるような輩ではないのはお前らも十重承知しておろう？　目覚めたとき、あやつは真っ先にここにきて、葉月をさらって行くぞ　」

途端にファイが叫ぶように言葉を発した。

「魔王が来るなら殺すだけだ　」

……そうだ。

いくら町々を復興しようとも、僕たちは魔王という存在を消さなけ

れば、本当の意味での平和を成しえない。

捕まえるではなく、永遠に眠らせるのではなく、消さなければ…。

そこで、くっくっくっくっ、と何度目かのカオスの笑い声が響いた。

35：戦うしかない

「お主らでは無理じゃ。いくら多量の力を寄せ集めても、命をなくすだけ。無駄というもの…」

こういう『神様ですから、全部わかってます』みたいな傲慢なところ……かなりムカつく。

「そんなふうに決めつけないでほしいなー」

嫌味たらしく言ってやった。

魔王を倒すための秘策くらいある。

そりゃ、リスクは高い……ってか、僕は死んじゃうけどさ。

魔王さえ倒せれば死ぬことなんて苦じゃない。

寧ろ僕一人の命で済むのだから、安上がりなもんだ。

すると、少し怒ったかのようにカオスが僕たちの方を改めて見た。

「分かっておらんようだから言っておくが、ルシファーはお前らと戦うために来るのではない。葉月を取り戻すためにここに来るのじゃ」

「それなら尚更、戦うしかない　」

ファイのこの一言。もちろん僕も、

「同感　」

…すると一気に辺りの空気が重たくなった。

ずっしりと乗りかかってくるそれは、まるで僕らを地面に押さえつけているかのようにじりじりと重さを増す。

その中で軽々とこちらに歩み寄るカオスからは、冷たい何かが感じられた。

「この阿呆が、葉月をルシファーに渡さんとまた世界の半分…いや、今度はすべてが滅ぶやもしれんのだぞ！　」

この重さを何とかしようと考えに耽っていた僕の代わりにファイが答えた。

「…っく、それは、どういうことだ？　」

カオスは目を見開いて、一瞬身動きを止めた。

…先ほどの傲慢な態度とは打って変わって、ファイが言った言葉にかなり驚いた様子だ。

分からない。

いったい何故そこまで驚くのかが……。

こりゃあ、…裏がありそうだ。

「お主らは知らぬのか！　世界の半分を灰にしたのがルシファーであることを　」

またも急に怒鳴りだしたカオス。

「知……てるよ、それぐ…らい　」

神さまでも野暮なことを聞くもんだね…。

この世界でそのことを知らないものは誰一人としていないのに。

「そこ……で、何故…葉月が出て…くるんだ！　」

重さが増している中で答えたファイの言葉に、カオスの何か（我慢の線）が切れたようだった。

「貴様ら…疎い。　何も知らんと、葉月に近づいたんか…。ならばその真実、お前らにくれてやるわ！　」

そう言い放ったカオスの手から瞬時に放たれた光の中に、僕らは取り込まれていった…

３５：戦うしかない（後書き）

次回からは、ルシファーと葉月の過去のお話です。

36：繋がり

ルシファーサイド◇◆◇

「私が除け者のような扱いをされるのは…あなたみたいな、魔力もろくに使えないできそこないが生まれてきたせいよ！」

――…ガジャン！！！！

怒鳴り声の後に続いたのはガラスが何かに当たって割れる音。

その何かが俺であることに、まったく気づけないでいた。

自分の胸元を見てみると血だらけで、そのまま視線を下げると割れてしまった花瓶とそれに飾られていたらしい花が見えた。

それを見てようやく自分が痛みを感じていることに気づく。

花瓶を投げつけた本人…母親は息子が血を流しているのを見て、何を思っているのだろうか。

気晴らし、嬉しさ、恨み、あるいは悲しみ…。

…いや、そんなことはどうでもいい。

どうでもいい…。

この世界で唯一魔力を扱える種族であるエデン一族。

父は一族最強と謳われる気高い当主、母は貴族の出身でプライドの高い女。

最強と謳われる父の存在と高貴な母の存在によって、誰もが生まれてくる子供に期待していたのは言うまでもない。

が…生まれてきたのは、魔力が使えない俺。

いわば…できそこないだ。

それが原因かどうかは定かではないが、俺が物心つくころ、すでに父と母の仲はあまり…いや、かなりよくなかった。

その一例を言えば、父は他に女を作って子供もできた。

そして母はそのことを知った後、何度もその女と子供を抹殺しようとした。

最終的に成功したのか失敗したのかは定かではないが、その子供は父親の能力を受け継いで、魔力に秀でているらしい。

よって一族の次期当主として大切に守られている確率が高い。

…そのようなことが積み重なった結果、日に日に母のストレスは溜まっていった。

その恨みの矛先は当然俺に向けられる。

顔を合わせれば生まれてこなければよかった、消えろ、などと言われるのは当たり前。

むしろそのくらいならまだましだ。

首を絞められ、殺されかけたことも何度もある。

でも俺は…何も感じない。

憎いとも、悲しいとも、悔しいとも…何もかも、すべて。

そんな感情たちは俺にはもう、ない。

もういっそのこと母に首を絞められたまま死ねたらいいと思うのだが、ギリギリのところで母はいつも我に返る。

『あなたが死んだら、あの人との繋がりが何もなくなってしまう！』

と言いながら。

自分で死ぬ勇気すらない俺のくだらない言い訳だが、その言葉が唯一感情のないはずの俺をこの世界に繋ぎ止めているのかもしれない。

他人と他人の繋がりの為だけに、生きている。

それでいい、それだけでいいと思っていた。

愛おしい、その意味を教えてくれる少女に出会うまでは…。

37：苦しさと、温かさ

母や他の人間と顔を合わさないように、屋敷の裏にある湖のほとりで、ただ日が昇って降りるのを目にするだけの一日。

そうして、その日もいつもと同じように始まって終わるはずだった。

その湖は屋敷の豪華さ華やかさにとは真逆で、昼間でも何処かうす暗い。

…あくまでエデン一族の力を示すためだけに作られた伝説のようなものだが、この湖の底にはエデン一族の祖先によって至上最悪最大な力を持つ悪魔、ベルゼブルが封印されているらしい。

封印がベルゼブルの強大な魔力によって解けないように、なお且つ、他の下級の悪魔がベルゼブルの封印を解かないようにするために、エデン一族はその湖のすぐ傍に生活しているとか。

それが理由で儀式のとき以外は、誰もこの湖に寄り付こうとはしない。

結果、ここは俺にとって人の言葉を何ひとつ聞かなくて済むその場

所。

何も考えず、何も感じず過ごす。

見えるものは黒が濃く混じった太陽の光と、途方もなく…果てなく大きな水たまりだけ。

より感情なき無になれる場所。

今日もその場所に居座って、いつものようにただ時間が過ぎていくのを待っていた。

「今日は晴れだよ、お兄ちゃん」

不意打ちだった。

……これは人の言葉だ。

まるで気配を感じなかったが、今の声の大きさから推測して、声の主はすぐ傍に居る。

どうしてここに人がいるのだとか、そんなことはどうでもいい。

聞きたくない『人の言葉』に不快になった俺は、その声から逃げようと立ち上がり、声の主を見ることなく歩を進めた。

数分歩いた後、さすがにもう付いてきてはいないだろうと、腰を下ろそうとした。

が、

「お兄ちゃんは……」

それが聞こえた途端、俺は走り出した。

普段この湖に来ること以外は動くことのない俺の脚は悲鳴を上げたが、それでも走った。

その後すぐに力尽きた俺は『息が切れる』という、久しぶりの感覚についていけず、その場に崩れ落ちた。

「……はぁ、はぁ…、うっ、…」

息を繰り返すのが苦しい。

酸素を求めて、仰向けに転がっていた俺の視界に、まだ幼さの残る少女が映った。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

嫌だ、やめてくれ…。
人の声を聞きたくない。
人を見たくない。
…苦しい。

いや……、…温かい。
温かい何かが俺を包み込んだ。

「大丈夫、きっと大丈夫 」

何度もそう言いながら、ぎゅっと首元に抱きついていた人間。
こんなことを言われたこともされたこともない俺は、どうしたらいいのか分からない。

人に触れられるのは不快でしかないはずなのに、その温かさを振りほどくことはしたくなかった。

「お兄ちゃんは冷たくて、気持ちがいいね」

一段と抱きついてくる力が強まった。

温かい。

その温かさによって、決して姿をみせることのないほどに固く凍りついていた俺の感情が、少し……ほんの少しだけ解けた気がした。

38：気持ちの変化

「お兄ちゃん、もう大丈夫？　」

今はもう先ほどのように抱きついてはいないものの、俺の傍を離れようとしない少女は、何度も何度もそう聞いてきた。

ここ何年か…ろくに声を発していない俺がそれに答えることはなかった。

が、それでも何度も聞いてくるので、大丈夫だという意味を込めて頷いた。

「よかった　」

そう言って、嬉しそうにほほ笑む少女。

その直後だった。

「……ス、リリス！！　何処にいるの、リリス…　」

風に乗って、遠くの方から高い声が微かに響く。

「お母様だ！　」

それに気づいたらしい少女は先ほどの笑みを残したまま、立ち上が

った。

「お兄ちゃん！　辛いときは、笑うんだよ　」

俺の両頬に小さな手を当てて言う。

その手の温もりがとても心地よくて、瞼が重くなった。

「笑っていた方が、幸せになれるんだって　」

直後、どこか悲しげな笑顔になった少女はそっと手を離すと、

「それじゃあ、お兄ちゃん、またね　」

と言って声のする方向へ駆けて行った。

またね、ということは、再びあの小さくて温かい少女に会うことができるのだろうか。

そう思うと、胸の辺りが少し暖かくなった気がした。

屋敷内で眠る、ということは俺にとって休息ではなく、ただ目を閉じるだけの行為。

しかしその日の晩は、目を閉じたのがいつなのか分からないほどに深く眠ることができた。

結果、いつもは朝日が昇ると勝手に目が覚めるはずが、昼過ぎまで寝てしまっていた。

目覚めと共に湧き上がってくる強い思い。

あの子がいるかもしれない……、早く湖に行かなくては。

いつもと違う感覚に少々戸惑ったが、居ても立っても居られなくなって、急いで支度し、部屋のドアを開けた。

……部屋のドアをあけた…ら、目の前にあの少女がいた。

驚きのあまりあとずさる俺、その分近寄ってくる少女。

「やっぱりお兄ちゃんだ！　昨日、このお屋敷に帰ってくるのを見かけて、捜してたの！」

その笑顔を見て、会いたかった、という言葉が口からこぼれそうになった。

39：声

それにしても、どういうことだ…。

ここはエデン一族の屋敷内。

一般人や貴族でさえ、おいそれとその広大な敷地に入ってくることはできない。

一族と選ばれた使用人だけが暮らしている場所であるのに、今少女は目の前に居る。

…その上、昨日からずっといるような口ぶりだった。

「リリス！」

昨日も聞いた高い声が突然響いた。

「リリス、あなたまた抜け出してきたのね。部屋で待ってなさいって言ったでしょ」

走ってこちらに駆け寄ってきた女は、その勢いのままパンっと少女の頬を叩いた。

「ごめんなさい、お母様。でもね、私どうしてもお兄ちゃんに会い

たくて……」

叩かれた頬は赤くなっていたが、少女が気にする様子ない。

それはまるで叩かれることが普通であるかのようだった。

「お兄ちゃん…って、あらっ、ご子息様！！　挨拶もなしに、申し訳ございません」

俺の存在に気付いた女は、少女の頭を押さえつけて無理やり頭を下げさせた。

「なんと言ったらよいのか……私どものご無礼をお許しください」

女も深く頭を下げた。

「ほら、ご子息様にご無礼働いたこと、謝りなさい！」

そう言って、今度は少女の腕を強く引っ張って、床に押し付けた。

土下座でもさせるつもりか…？

「お母様、痛、い…」

少女は震えながらそう言った。

が、その言葉に腹を立てたのか、女はより強く少女を床に押さえつけた。

「そんなことはどうでもいいの。謝りなさい、早く！」

心臓をぶすぶすと釘で打ちぬかれているかのような感覚に陥った。

……もうこれ以上見ていたくない。

少女が…リリスが痛がるのも、怖がるのも見たくない。

止めさせるためには、俺の言葉が必要だ。

俺は深呼吸して、何年かぶりに人の前で声を出した。

「別に謝る必要はない。　その方、下がれ　」

思ったよりまともな声が出たのでホッとした。

女は目を見開いてこちらを見る。

「はっ、はい。　リリス、行くわよ　」

「俺は、お前に下がれと言った。　リリスとやらは、別にここにても構わない　」

本能のまま、自分がそう言いたいと思うままに言葉を口にした。

「そんな！　滅相もございません」

女は再度、強くリリスの腕を引っ張って俺とは逆の方向へ行こうと

する。

「リリス…あなた泣いてるの、みっともないわね。ぐずぐずしてないで、さっさと歩きなさい 」

この女、消えればいいのに…という思いが手のひらを固く握らせた。

「お前は俺に同じことを二度も言わせるつもりか 」

少しの間、時間が止まったかのように誰も何も動かなかった。

先に動いたのは女で、何も言わず、深々と頭を下げてその場から去っていった。

女から解放されたリリスは俯いてその場に立ち尽くす。

その目からは大粒の涙が零れ落ちているのに、…笑顔だった。

俺でも分かるほどに、悲しく、苦しそうな笑顔だった。

『辛いときは、笑うんだよ 』

昨日リリスが言った言葉が今、また聞こえた。

あぁ、この子も辛いのか…。

それでも笑顔を作るのか…。

４０：嬉しい、イトオシイ

気がつけばその小さな体を抱きしめていた。

昨日俺がそうされたのと同じように、優しく、強く。

――――…苦しいのは、俺だけじゃない。

この子は俺よりもはるかに幼いのに、苦しさを耐えて笑顔であり続ける。

それが羨ましくて、……胸の辺りに何か…得体のしれない重さを感じた。

生きてきて今まで感じたことのないその重さは、心底心地よかった。

「リリス、　」

そっと頭を撫でながら、初めてその名を口にした。

「リリスは強いな。……それにとても温かい　」

言い終えた時、リリスが俺の服をぎゅっと掴んだ。

嬉しい

今この時の、この瞬間の、この湧き上がる気持ちが『嬉しい』なのだろう。

ただその手が俺の服を掴んだだけだとしても、俺が『必要だ』と言われている気がして…。

嬉しくて、たまらない。

ずっとこのままでいたい。

ずっと、ずっと……。

何を話すでもなく無論離れるわけでもなく、随分と長い間、俺とリリスは抱き合ったままでいた。

流れるものは、俺とリリスの鼓動の音。

その心地の良いリズムを乱したのはリリスの声だった。

「お兄ちゃん　」

腕の中で今まで俯いていたリリスが、こちらを向く。

もう涙は流れていないようだし、悲しそうな笑顔ではなかった。

「どうした？　」

「……一緒に、いてくれる？　」

声が少し震えている。

これが…不安、というものなのだろうか。

もし俺が傍に居ることで、少しでもその不安が和らぐのなら…。

答えは当然、決まっている。

「あぁ。一緒に居る　」

俺が一緒にいたいから。

「ずっと？　」

「ずっとだ　」

服を掴んでいた力がなくなった代わりに、リリスの両手が俺の頬を撫でた。

「今、お兄ちゃんの名前が呼びたい 」

優しく頬を撫でる手が、嬉しい…。

いや、これは『嬉しい』じゃない。

もっと別の、大きなものだ。

嬉しいよりもっと大きなもの…。

――…イトオシイ

あぁ、これは嬉しいじゃなくてイトオシイ、だ。

優しく頬を撫でる手が、イトオシイ。

この気持ちこそがイトオシイなのか…。

また一つ、俺の中の凝り固まった感情をリリスはいとも簡単に呼び起こしてしまった。

「ルシファー・エデン、だ 」

「ルシ、ファー・エデ、ン？　」

「長いからルシファーでいいよ　」

「ルシファー、　」

名を呼ばれることだけで、心躍る。

「そう。ルシファー　」

リリスを抱きしめていた腕を離して、リリスが俺にしてくれたのと同じように頬を撫でた。

…俺はリリスの真似ばかりだ。

抱きつくことも、頬を撫でるこの行為も、教えてくれたのは全部リリス。

「ルシファー、ずっと一緒　」

「ずっと一緒だ　」

太陽の光よりも眩しくて、月の明かりより美しいその笑顔。

俺だけにその笑顔を見せてほしい。

俺だけの笑顔にしたい、そう強く思った。

４１：心配性（前書き）

サブタイトル、本当はもっと長くてですね…

４１：クールなイメージ崩壊！極度に心配性なルシファー（リリス限定）

なのです。（笑）

41：心配性

特に何をするでもなく、ただリリスと2人で他愛のない話をしていただけだったが、それだけでとても心安らぐ時間を過ごせた。

湖に行かなかった日、というのは数年ぶりのことだ。

普段、この部屋に留まり続けると窒息死してしまうほどの息苦しさを感じる。

それがまるで嘘のように、楽で……落ち着く。

しかし、夕日が部屋の中に差しこむ頃、大切な約束があるからと言ってリリスはどこかに帰ってしまった。

その後、リリスがいなくなるとすぐに息苦しさを取り戻した部屋。

湖に行こうか迷ったが、ここで時間が過ぎるのを待った。

もしかしたらリリスに会えるかもしれない、という期待を抱きながら。

闇と静寂に包まれた深夜。

ガタンっと部屋の扉の開く音がして、眠りの浅い俺はすぐさま覚醒した。

こんな夜中にいったい誰が…。

「ルシファー、　」

それは遠慮がちなリリスの声だった。

「ん？　どうした、こんな夜遅くに…　」

返事をしてやると、走ってこちらに向かってくる様子が足音で分かった。

それにつられて俺もベッドから急いで降りる。

「一緒に…隣で、寝てもいい？　」

いきなり何を言い出すのかと、思考と動きが固まってしまったが、なんとか立て直して返事をする。

「…あぁ、　」

声がやや裏返ってしまった。

誰かが傍に居て一緒に眠りに就く、という記憶はない。

幼いころ母に添い寝された記憶なんてものは一切ないから。

無論父にも。

だからどうしたらいいのか、分からないので困る。

……一緒に寝るなら、必要なものは何か。

布団は今あるのできっと大丈夫なはずだ。

ベッドも大きいから（キングサイズ）、リリスが寝返りを打っても問題ないだろう。

枕は……。

俺の枕は結構大きめだから、リリスは寝苦しくなってしまうに違い

ない。

まして寝返りをうったときに枕が邪魔で息が出来なくなってしまったら大変だ。

「ちょっとここで待っててられるか？　」

頭を撫でながら言う。

何度も頷く愛おしいリリスを置いて部屋を飛び出した俺が向かった場所は、使用人が寝泊まりする場所。

基本的にここの使用人たちは皆住み込みで働いているので、狭いながらも部屋が与えられる。

その部屋に行けば枕くらい、なんとかなるだろう。

人と話すのはただただ煩わしいだけだが、リリスの為だと思うとそんな気持ちは一瞬にして消えうせた。

42：枕

真夜中だというのに目的の部屋の明かりは灯っていた。

よって誰かが起きているのだと判断し、煩わしいのでノックもせずに部屋に踏み込んだ。

そこには数人の女たちが談笑している様子だった。

「枕を一つ、もらえないか？　」

「ルシファー様！？　」

皆、驚きのあまり固まっている。

俺がここにわざわざ出向くこと自体、ありえない。

その上言葉を発したのだから、驚き固まるのも無理はない。

間もなく、1人の女が口を開いた。

「ご不満がございましたら、お部屋の魔方陣を伝って言ってくださればよかったのに…　」

続いて、もう一人。

「そうですわ！　私たち、すぐにお部屋に駆けつけましたのに！　」

ああ、うるさい。

「…戯言はいい。早くしてくれないか 」

「はっはい 」

使用人が焦って連れてきた、物置のような部屋の古そうな棚の上に枕はいくつもあった。

「こちらでよろしいでしょうか 」

そう言って手渡してきた枕は…俺の枕と同じだ。

「大きすぎる。もう少しちいさいものがいいのだが 」

いっそう驚いた様子でこちらを見る使用人。

俺がうるさく言うのがそんなに奇妙なのか。

「こちらはどうでしょうか… 」

今度は恐る恐る、といった様子で枕を見せてきた。

「それでいい 」

「ど、どうぞ… 」

奪い取るように受け取って、さっさとその場から離れようとした。

……のだが、重要なことを忘れていた。
ここに来る途中に、せっかくの機会だからリリスのことについて聞こうと思っていたのだった。
「もう一つ、いいか 」
慌てて一人の侍女が返事を返した。
「はいっ 」
「最近親子でここの使用人になった者はいるのか？ 」
あの待遇からしておそらく使用人ではないと思われるが、その可能性はないともいえない。
「いいえ。使用人はここ数年変わっておりません 」
やはり…か。
「来客か何かでここに滞在している親子は？ 」
「それなら…ネオ夫妻とそのお子さんが先週からこちらに滞在しております 」
「ネオ夫妻…？ 」
聞かない名だ…。

どこぞの貴族や王族のような身分の高い者ではないようだ。

しかし、そんな者が何故この屋敷に…？

「ネオ夫妻は旅をしながら悪魔の研究をしているのだとか…」

いわゆる悪魔研究家か。

だとしてもおかしい…。

ここはそのような庶民がおいそれと入ってこれるような場所ではない。

「悪魔研究家が何故ここに――…」

淡々と進められていた会話が途切れた理由。

それは誰にもその姿を気づかれることなく、一瞬で俺に跳んで抱きついてきた愛おしい存在にこの場にいる誰もが驚いたからだった。

43：波乱の幕開け

「ルシファー！！　」

そう言ってしがみ付いてきた体をそっと優しく自分の腕で包み込む。

「リリス、どうしてここに…？　」

リリスの存在を確認するために顔を近づけて、その温もりと香りを確かめる。

この子はまぎれもなくリリス、だ。

「1人がね…怖くなって。ルシファーが今どこに居るのか、リリス、絶対分かるの！　だから、来たの…。……ごめんなさい　」

その瞳から涙が今にも落ちてきそうだった。

リリスは俺にわざわざ会いに来てくれたのに…泣かせたくない。

強くそう思った。

「リリス、俺は何も困っていないし、寧ろリリスとこんなに早く会えて嬉しい。だから謝らなくていい。それに俺の居場所が分かるなんて、リリスはすごいな　」

頭を撫でてやる。

泣かせたくない、という俺の気持ちが伝わったのか、心地よさそうに微笑むリリスの顔が覗けた。

……よかった。

「リリス、もう遅いから早く帰って寝るぞ　」

「うん！　」

そうしてすぐに部屋に戻り、無事調達した枕で二人並んで平和にすやすやと眠りについたのだ。

…のだが、しかし…この時俺は重要なことを忘れたままでいた。

その場に残された侍女たちは、あの現場をどのように理解するのか…。

何も知らない者があの現場を見たら、ほぼ全員があらぬ方向へ勘違いするだろう。

『無口でクールなはずのルシファー様が、まだ幼い客人の娘ととても親密な関係である。』と。

『確かにあの幼い少女は美しかった…。でも今まで誰とも関係を持たなかったルシファー様があんな幼い少女に気を許しなさった。そ

れなら私も見初められる可能性があるかもしれない。』と。

噂に羽根や尾が付くのは当然のことだ。

しかしここはエデン一族の敷地内。

皆、我先に何とか気に入られて、いい暮らしがしたいと思っている者も少なくない。

例え、魔力がなかろうがなんだろうが、地位と財産を手に入れようとする者にとってエデン一族の一人である俺、ルシファーはいい駒なのだ。

伸し上がろうと考えている者にとって、この噂は絶好のチャンス到来の予言。

俺たちが眠りに就いた時にはすでに屋敷中の使用人に、噂という名の予言は知れ渡っていた。

そしてこの噂が今後とんでもない事件を巻き起こすことになる。

そんなことになるとはつゆ知れず、俺は横に居る愛おしいリリスを眺めていた。

熟睡しているリリスの柔らかな髪を何度も何度も撫でて愛でる。

心というものが俺の中に存在していると教えてくれたリリス。

それだけでなく、リリスはただ傍に居るだけで俺の心を満たしてくれる…温かいものにしてくれる。

言葉では言い尽くせない存在だと、改めて思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9659g/

月の瞬き

2010年10月10日19時53分発行